

新書へのとびら

講談社現代新書創刊60周年



第1部 特別寄稿 魚住昭

現代新書はいかにして現代新書になったのか

第2部 全国の書店員がすすめる

「現代新書、この60冊」

第3部 現代新書を知るためのトリビア10

60
周年
講談社現代新書

「講談社現代新書」の刊行にあたって

教養は万人が身をもって養い創造すべきものであって、一部の専門家の占有物として、ただ一方的に人々の手もとに配布され伝達されうるものではありません。

しかし、不幸にしてわが国の現状では、教養の重要な養いとなるべき書物は、ほとんど講壇からの天下りや単なる解説に終始し、知識技術を真剣に希求する青少年・学生・一般民衆の根本的な疑問や興味は、けっして十分に答えられ、解きほぐされ、手引きされることはありません。万人の内奥から発した真正の教養への芽ばえが、こうして放置され、むなしく減びざる運命にゆだねられているのです。

このことは、中・高校だけで教育をおわる人々の成長をはばんでいるだけでなく、大学に進んだり、インターネットと目されたりする人々の精神力の健康さをもむしばみ、わが国の文化の実質をまことに脆弱なものにしています。単なる博識以上の根強い思索力・判断力、および確かな技術にささえられた教養を必要とする日本の将来にとって、これは真剣に憂慮されなければならない事態であるといわなければなりません。

わたしたちの「講談社現代新書」は、この事態の克服を意図して計画されたものです。これによってわたしたちは、講壇からの天下りでもなく、単なる解説書でもない、もっぱら万人の魂に生ずる初発的かつ根本的な問題をとらえ、掘り起こし、手引きし、しかも最新の知識への展望を万人に確立させる書物を、新しく世の中に送り出したいと念願しています。

わたしたちは、創業以来民衆を対象とする啓蒙の仕事に専心してきた講談社にとって、これこそもつともふさわしい課題であり、伝統ある出版社としての義務でもあると考えているのです。

右の刊行の言葉は今から六〇年前、現代新書の誕生に際して気鋭の教育学者であった村井実教授が中心となって起草されたものです。

この六〇年は、けっして順風満帆ではありませんでした。高度経済成長のまったただなかに創刊され、昭和、平成、令和と時代が移る中で、現代新書も変わり続けてきました。しかし、根本に変わらざるものは、「知」を一部のインテリのものでなく、世に生きるすべての人々に開かれたものになりたいという願いです。「もっぱら万人の魂に生ずる初発的かつ根本的な問題をとらえ、掘り起こし、手引き」する新書を作りたい。その思いが六〇年の歴史を紡いできました。

この記念冊子は3部からなります。第1部にはノンフィクション作家・魚住昭氏による特別寄稿「現代新書はいかにして現代新書になったのか」を収録しています。ここではそもそも新書という形態の書物がどのように生まれたのか、そのなかで現代新書がいかに紆余曲折を経て誕生したのかが描かれています。第2部はアンケート「現代新書、この60冊」です。全国の書店員の方々にご協力いただき、思い出の現代新書を語ってもらいました。そして第3部の「現代新書を知るためのトリビア10」では、現代新書のさまざまな記録を辿っています。

この冊子が現代新書、ひいては新書そのものへの「新たなとびら」になればと願っています。次の時代に向かって、講談社現代新書は走り続けます。変わらぬお引き立てのほど、よろしく願います。

二〇二四年四月

講談社 学芸第一出版部

目次

第1部 現代新書はいかにして現代新書になったのか 魚住昭

3

1 加藤勝久という男

黒柳さんの文章にビックリしました／『怒ぎわのトットちゃん』をめぐって／松下竜一の場合／二度も辞表を出す／新天地——学芸図書第三出版部／「学者の本は出さない。東京の人間の本は出さない」／ヒット連発／岩波は石牟礼の原稿を拒んだ／これが理解できないようでは……／打って変わって／大宅賞受賞辞退と朝日の「誤報」

2 新書という器とその読者

岩波新書の誕生／カッパ・ブックスの大躍進——加藤秀俊の鋭い分析／中公新書創刊／中間文化論／「事実」と「読みやすさ」を重視して／堂々たるマニフェスト／足澤禎吉と講談社の苦境／僕みたいなズブの素人にどうしてやらせるのかな／講談社始まって以来の大撤退／岩波にばかり学術的なものを奪われている必要はないじゃないか／村井実は語る／新制中学卒でも十分わかる新書をつくったらしい

3 現代新書が現代新書であるために

こんなもの、できっこない——冷ややかな社内空気／とにかく四回、絶対行け／初発的かつ根本的に／理念と現実とのギャップ——進学率の上昇／どれをとってもかなわない／池田大作に本を頼むくらいの勇氣はないのかね／基本理念の否定／杉浦康平を起用！／すべてが変わった／再録とブランチ／絶頂と翳り／もはや潮時——『DAYS JAPAN』の誤報騒動／ふたりの加藤／精神のリレー

第2部 全国の書店員がすすめる「現代新書、この60冊」

97

第3部 現代新書を知るためのトリビア10

139

第1部

現代新書はいかにして 現代新書になったのか

うおずみ あきひろ
魚住 昭

一九五一年熊本県生まれ。一橋大学法学部卒業。共同通信社を経てフリージャーナリストとして活躍。『野中広務 差別と権力』（小社刊）で第26回講談社ノンフィクション賞受賞。『渡邊恒雄 メディアと権力』『出版と権力 講談社と野間家の一一〇年』（ともに小社刊）など著書多数。

1 加藤勝久という男

黒柳さんの文章にビックリしました

編集者ほど割に合わぬ商売はない。なぜかという、まず第一に、著者という人種は私を含め、だいたいわがままで怒りっぽい。しかもそういう著者に限って筆が遅い。編集者はそんな人間をおだてたり、なだめすかしたりして原稿を書かせなければならぬ。

第二に、苦心惨憺して仕上げた本が運よく評判をとったとしても、世に知られるのは著者の名だけである。編集者はどこまで行っても縁の下の力持ちにすぎない。

第三に、これが一番やるせないのだが、著者は往々にして忘恩の徒である。自分の下手な原稿に手を入れ、どうにか読めるようにしてくれたのは編集者だという事実をすぐに忘れる。自分一人で書いた気になり、感謝の言葉すら口にしないことがある。

結局のところ、編集者は報われぬまま、この作品を世に送り出したのは自分だというひそかな誇りを胸に生きていくしかない。それが編集者の宿命というものだろう。

そんなことをつらつら考えながら、創刊六十周年を迎える講談社現代新書の歴史を調べ

ていたら、現役編集部員の横山建城よこやまたてきから「加藤勝久かとうかつひささん恐るべし！」という見出しのメールが届いた。加藤勝久とは、今ではほとんど忘れられているけれど、戦後の講談社で一時代を画した編集者である。そしてなによりも本稿との関連でいうなら、いまから半世紀前、休刊寸前に追いこまれた現代新書の救世主となった男である。

横山のメールの本文にはこうあった。

昨日（二〇二三年十二月十五日）の野間四賞の贈呈式も無事に終了いたしました。ことは芦田愛菜あしだまな、黒柳徹子くろやなぎてつこ、藤井聡太ふじいさうたの三氏が出版文化賞受賞でしたから取材が多く、会社も満足だったんじゃないかと思えます。それはさておき、賞の冊子にある黒柳さんの文章にビックリしました。やはり加藤勝久さんはすごいです。トットちゃんには「前史」があつたわけです。

実は、このメールの数日前、横山と私は現代新書のOB編集者に会い、彼から加藤勝久が残した業績の大きさを教えられたばかりだった。その矢先、思わぬところで加藤の名に出くわしたので横山は驚いたのである。ちなみに、野間四賞とは、講談社の初代社長・野間清治のませいじの遺志によって設立された財団が主催する賞のことだ。

『窓ぎわのトットちゃん』をめぐって

授賞式会場で配られた冊子の「受賞の言葉」に黒柳はこう書いていた。

これまで、たくさんのお贈り物をいただけてきた。中でも、今から六十年以上前、私が、「婦人公論」に書いたトモエ学園にまつわる短いエッセイを読んだ講談社の加藤勝久さんが、「一冊に書いてみませんか？」とわざわざ逢いにきてくださって、パンに膨らんだ紙袋の中に「講談社」と印字された二百字詰め原稿用紙がたくさん入っていたときの嬉しさは忘れられない。

空前のベストセラー『窓ぎわのトットちゃん』誕生にまつわるエピソードである。昭和三十四、五年ごろ、若手タレントとして注目され始めていた彼女は、雑誌『婦人公論』の依頼で子ども時代をすごしたトモエ学園での体験を短い随筆に書いた。すると、『婦人公論』のライバル誌『婦人倶楽部』の編集部員だった加藤がやってきたというのである。

が、加藤が渡した原稿用紙にはトットちゃん原稿は書かれなかった。なぜなら、黒柳

が言うには「当時から、少しずつ原稿の依頼があつた私は、「ラッキー！」とばかりに、それをトモエ以外の原稿を書くことに使ってしまった」からだつた。

それから十数年、加藤が点^としたたいまつは講談社学芸図書第二出版部の岩本敬子^{いわもとけいこ}に引き継がれた。岩本は黒柳とほとんど同じ世代で、同じ東京生まれ。学童疎開の経験があることも共通していた。岩本はのちの取材に答えて、「『トットちゃん』の中に展開する東京周辺の牧歌的風景は、私の幼時に焼き付いたそれとオーバーラップしてくる」と語つた。書きたいテーマをもっている著者と、それに共鳴・共感できる編集者との幸福な出会いだった（社史『物語 講談社の100年』より）。

岩本は黒柳にいきなり単行本を書き下ろしてもらうのは無理だと考え、講談社の月刊誌『若い女性』に連載してもらふことにした。黒柳の「受賞の言葉」のつづきである。

……「若い女性」で『窓ぎわのトットちゃん』の連載をすることになったときは、また山もりの原稿用紙を頂戴し、お陰様で、『トットちゃん』は大ベストセラーになった。「百万部売れています」なんて言われても実感が湧かなかつたが、NHKのニュースで、印刷会社からトラックいっぱいの本が出荷されている映像を見て、初めて、「すごいなあ」と思った。

昭和五十六年（一九八一）、初版二万部で刊行された『窓ぎわのトットちゃん』は爆発的な反響を呼び、年末には四百万部を突破した。その後も増刷に次ぐ増刷を重ね、現在までの累計発行部数は日本国内で八百万部、全世界で二千五百万部を超え、時代も国境も超えたロングセラーとして世界中の人びとに愛されている。

そして令和五年（二〇二三）、黒柳は『続窓ぎわのトットちゃん』を上梓した。担当したのは現代新書編集部（学芸図書第一出版部）の次長・井本麻紀である。彼女には黒柳のほうから続編執筆の提案があったという。事前の予想どおり、続編はたちまち五十万部を超えるベストセラーになった。

黒柳は「受賞の言葉」のつづきで「前作のファンで、「続きを読みたい」と思ってくれた人が多いのだそう。四十年以上前とか、そんな昔に読んだ本のことを、今も大切に思ってくれているなんて！」と述べたうえで、こう締めくくっている。

本の寿命というのは、人間の寿命なんかより、ずっと長いのだ。この野間出版文化賞も、加藤さんの時代から連続と続く、贈り物のリレーなのかもしれないと感じている。

それにしても、黒柳は講談社の社員ですら忘れかけている加藤の名をなぜ、ここで突然出したのだろう。彼女の律儀さと言えばそれまでだが、私はもうひとつ隠された理由があるような気がしてならない。あとで説明するつもりだが、加藤の編集者人生は晩年不幸なかたちで終わっている。黒柳はそれを知っていて、自分は今も加藤へのリスペクトを失っていないのだということを示しておきたかったのではないだろうか。

松下竜一の場合

黒柳の例だけでなく、加藤はその鋭敏な嗅覚で数多の才能を発掘している。私たちが先に会った現代新書OBによると、『豆腐屋の四季』や『ルイズ 父に貫いし名は』などの名作で知られるノンフィクション作家の松下竜一まつしたりゅういちもその一人である。

松下は大分県中津市生まれ、幼児期に肺炎による高熱で右目を失明、青少年期には結核にかかり、母の死で大学進学を断念し、家業の豆腐屋を手伝いはじめた。昭和四十三年（一九六八）、そんな地方青年の切ない気持ちと和歌と文章で綴った自費出版本を出した。中津の印刷店で作ってもらったタイプ印刷の粗末な本だった。

『出会いの風 松下竜一未刊行著作集 2』（海鳥社刊）に記された本人の弁によると、他に読者はつかなくても、五人の姉弟に読まれるだけでいいという覚悟で出した自費出版書

だったが、すぐに千冊がなくなった。そのとき初めて、どこかの出版社が公刊してくれないだろうかと思つたのだが、彼には知り合いの編集者はいない。仲介してくれる人もいなかった。

たまたまそのとき読んでいた本に挟まれていた読者カードを目にして、「そうだこのはがきの宛先に本を送ろう」と思いついた。それが講談社の「心シリーズ」という著名人の心を伝えるエッセー集だった。「著名な人だけでなく、町の無名の豆腐屋の心も伝えてほしい」といつた手紙を添えて粗末な本を送り出したのは、その年の暮れである。

加藤から「ぜひ出版したい」という返事が速達で届いたのは年明けの一月八日だった。「のちに思えば、これは稀にみる幸運だったのだ。ふつう大出版社に紹介者もなしに送りつけられた原稿や自費出版書が、編集者に読んでもらえるチャンスはほとんどない。おそらく、特別な嗅覚を持つ編集者であつたからこそ、この粗末な自費出版書を読んで下さつたのだらう」と、松下は振り返っている。

デビュー作『豆腐屋の四季』は昭和四十四年（一九六九）四月に公刊され、大きな反響を呼んだ。いわば名伯楽めいはくらくを得て松下は世に出たのだが、彼が名伯楽にも悩みがあると知つたのは、十三年後の昭和五十七年（一九八二）のことである。

この年、松下は無政府主義者・大杉栄おおすぎさかえの遺児の人生をたどつた『ルイズ 父に貰いし名

は』(講談社刊)により第四回講談社ノンフィクション賞を受賞した。授賞式のあと銀座のクラブを引き回したのは加藤だった。彼はしきりに「これでぼくもほっとしたよ」という言葉をくり返した。松下はつづけてこう書く。

これまで(加藤)氏は多くの新人の本を世に送り出したが、それを機にそれまでの職を捨てて作家へと転身する例が多く、そのほとんどはつぶれていったという。そういう悲劇を見るたびに「あのとき自分が本を出してやったばかりに」と、にがい悔いを抱いたのだ。

私もまた、『豆腐屋の四季』公刊の翌年に豆腐屋を廃業して転身したのだが、そのとき加藤氏は、「ああ、またしても……」と、悲劇を予感してくやんだという。

「もう心配ない。あなたは立派な作家になった」と繰り返して、氏はその夜遅くまでグラスを傾けていた。

もっと、加藤の人となりや足跡を知りたいと私は思った。しかし、その手がかりとなる文献が見つからない。彼ほどの大編集者なら回顧録の一つや二つあって不思議ではないし、彼の動向を伝える雑誌記事もすぐ見つかるだろうと思っていたが、おみや国立国会図書館や大宅

壮一文庫で検索してもまったくヒットしない。異様なほどの情報量の少なさである。そこにも加藤が講談社を去ったときの複雑な事情が影を落としているのだろうか。

以下は、社史『物語 講談社の100年』にある断片的な記述、『追悼 野間省一』（講談社 第四代社長の追悼録）に本人が寄せた短文、社史『講談社七十年史 戦後編』編纂のための座談に出席した本人の証言（以下「七十年史資料」）、それに、私の取材にに応じてくれた元部下らの証言などをもとにしたものであることを承知していただきたい。

二度も辞表を出す

のちに「卓越した編集者にして恐るべき酔っ払い」と評される加藤は、大正十四年（一九二五）生まれ。東大文学部の国文科を出て、昭和二十五年（一九五〇）、講談社に入社した。面接試験に長髪のまま臨んで、社長の野間省一のましよういちからそのいわれを訊かれたというから、そのころから自己流を押しとおす個性の強さが際だっていたのだろう。

そこが野間の気に入ったのか。並みの大企業ではありえぬことだが、新入社員のところからよく野間の酒の相手を仰せつかった。加藤は「貧乏学生時代からタシナミとしてバクダシ、カストリ、アワモリなどできたえてはいたが、やはり一流料亭の銘酒はまことに結構、社長と献酬二十余度ということもあつたし、ときに盃洗の器で一気飲みしたこともあつた」

と言い、「そんな報いで、ある夜、チヨコレート色のドロリとしたものを吐き、人知れず一月ばかり断酒したこともある」と打ち明けている。

加藤が『婦人倶楽部』の編集部にいたときのことらしいが、彼は野間に直接辞表を出したことがあった。それも二度も。

どうしてそんなことをしたのか、その辺が考えるとも一つはつきりしない。仕事の上のまろもろの不満を、誰にいうあてもないままに社長にぶつけたということだったか、社をやめるというのではなく、かくかくしかじかなるがゆえに現部署からはずしてほしいというほどのことだったと思う。社用箋二、三枚に書きつづり、あたりに人なき折、社長にじかに渡した。しかし、社長からは何の応えもなかった。握りつぶしである。

二度目は、たしかPホテル（パレスホテルであろうか）のロビーで手渡した、と加藤は『追悼野間省一』に書いてくる。

やはり思いつめた顔をしていたのだろう、社長はちよつと困ったような表情を一瞬

うかべたが、さし出した封筒をさりげなくポケットにおさめられた。このときもそれきりである。

東大の国文科卒で、卒論のテーマが「現代短歌」だったという加藤にとって、『婦人倶楽部』はあまり楽しい職場でなかったようだ。加藤は別のところでも「(僕は)婦人雑誌がイヤで飛び出した経過がある」と語っている。

新天地——学芸図書第三出版部

加藤はその後、第二編集局の新雑誌研究部の編集長になった。そこでどんな仕事に取り組んだのか、記録がないのでよくわからない。彼の本領が発揮されるのは、昭和三十七年(一九六二)、学芸図書第三出版部の部長(といっても部員三人ほどの小所帯だが)になってからである。そのとき、ようやく加藤は講談社で人生をまっとうする覚悟を決めたいらしい。『追悼野間省一』に次のように書いている。

三度目(の辞表)は……、さすがに出せなかった。少しはものを考えるようにもなっていたし、出したらおしまいだという気持もあった。雑誌から書籍編集にかわって

いたが、何よりも、文句をいって辞表を出すより、何か講談社でなければ出せないようなもの、講談社なればこそよく出したといわれるようなものを出したい気持ちになっていた。

社長は何もいってくれなかったけれど、そんなところをとくにお見通しで、黙って見ていてくださったのだろう。結局は、ひとりずもうのあげくに、ようやくと何かわかりかけたということか。社長もやれやれと思われたろう。

当時の講談社の機構はわかりにくいのだが、なぜか第一編集局の学芸図書第一出版部が純文学方面、学芸図書第二出版部は大衆文学方面を担当していた。そして、それ以外の学芸出版物（つまり非小説＝広い意味でノンフィクション）を受け持つのが、加藤の新天地となった学芸図書第三出版部だった。

そこで最初に取り組んだのは、すでに刊行準備が進んでいた大型シリーズ『20世紀を動かした人々』を予定どおり完結させることだ。が、このシリーズだけでは出版点数があまりに少ない。加藤はもっと活動分野を広げようと、試行錯誤しながら新たな単行本出版の可能性を探っていく。以下は「七十年史資料」に残る加藤の証言。

(自分が部長になったときは)すでに前からの企画で、例の『20世紀を動かした人々』全十六巻があつたわけですよ。だから、僕は社長に「これは私の自責点ではない」(魚住註…うまくいかななくても自分の責任ではないという意味)と言つた記憶があるんだけど、もうとにかく大変な仕事で、一卷に著者五人をつけてやるものだから毎回どんどん遅れていった。それに部員は三人しかいなくて、細々とやっていたのよ。だから(単行本は自分が部長になった昭和)三十七年が六冊、三十八年が九冊、三十九年が六冊しか出ていない。僕は婦人雑誌がいやで飛び出した経緯があるから、なにかやらなければいけないんだけど、なかなかそこまでいかないで、試行錯誤の感じでしたね。

そんななかでも、昭和三十九年(一九六四)八月に刊行した宗教学者・岸本英夫(きしもとひでお)の『死を見つめる心』がその年の毎日出版文化賞を受賞した。これはガン(おか)に冒(おか)されながらもくじけず、みずからの生と死を見つめた十余年を綴つた、命の記録である。累計で八万三千部を売り上げた。

さらに昭和四十一年(一九六六)には美術評論家・白崎秀雄(しらかさひでお)の『真贋』が日本エッセイスト・クラブ賞を受賞した。これは昭和の美術界で起きた著名な真贋事件、つまり美術品の贋作事件を十件検証したものだ。当時世評を賑わせた「佐野乾山事件(さのけんざん)」をいち早く取り上

げていたこともあつて話題を呼んだ。

加藤は『死を見つめる心』の成功を受け、以後、吉野秀雄^{よしのみでお}『やわらかな心』（昭和四十一年）、フェデリコ・バルバロ『愛を求めめる心』、岡部伊都子^{おかべいづこ}『美を求めめる心』（ともに昭和四十二年）などの「心シリーズ」を刊行した。それを無名青年だった松下竜一が読み、『豆腐屋の四季』の出版につながったのはすでに述べたとおりである。

「学者の本は出さない。東京の人間の本は出さない」

昭和四十一年（一九六六）、社内の機構改革で加藤の学芸図書第三出版部は、ノンフィクションの新企画を担当する学芸図書第二出版部となり、同年、美術学者の木村重信^{きむらしげのぶ}が『カラハリ砂漠 アフリカ最古の種族ブッシュマン探検記』で毎日出版文化賞を受賞した。

手応えをつかんだ加藤が、新しい体制下で試みたのが、全国規模で無名の著者を発掘し、その人でなければ書けない作品を生み出すことだった。まだ「ノンフィクション」という言葉が出版界に定着する以前のことだが、無名でも、さまざまテーマをもって、ひたむきに追究する人の書くものは、読む者の胸に迫るのだという確信が彼にはあった。

次も「七十年史資料」に残る加藤の証言である。

いま（当時のラインナップを）見てみると、有名人もいるけれども、無名人を少し発掘しようという気持ちだが、僕はあつたわけですよ。だから、壁に日本の白地図を張りまして、各県に一人くらい著者を持ちたいということで、だいたいやって、東北六県は（発掘した著者が）大概いたかな。九州もわりかた多いんだけど、全部で六十何パーセントくらいまではいったね。「世界にひらく講談社」だったけれども、国内もまだあるぞということで、もう少し耕そうじゃないかと、わりかた地方の出張に行ったですね。

第二出版部で加藤の部下だった菅野^{すがの}匡夫^{まさお}によると、部長席の後ろの白地図には、有望な著者が現れるたびに赤いほちちがつき、やがてそれが各県に二つ、三つと増えていった。

加藤は部内の編集会議で「学者の本は出さない。東京の人間の本は出さない」と口癖のようにくり返した。なぜかという、学者の本を出すのはどこの社でもやる。東京の著者も他社の目に入る。だから、われわれはそういう常識的な線を捨て、学者でも東京在住でもない著者の本を出すんだと言った。

加藤が地方にこだわったのは、別の計算もあった。講談社のように大きな出版社では社内での他の部署との競争が激しいから、自分らの本に広告予算をまわしてもらえない。だ

から売れるわけがない。だけど、地方なら地元紙の広告料は安いので広告を打てる。そうすれば、単行本の最低基準の三千部くらいは売ることができるといわけだ。

加藤は本社の席を温める暇がないほど地方を歩きまわり、埋もれた才能を発掘していった。部員たちも夜行列車で各地に足を運んだ。こうした努力で有望な著者が見いだされ、話題作、ベストセラーが相次いで生み出されていった。

ヒット連発

主だったものを挙げよう。まずは昭和四十二年（一九六七）に刊行されるや、たちまち世の話題をさらった『まぼろしの邪馬台国』である。

著者は長崎県・島原在住の実業家で、雑誌『九州文学』同人として歴史を研究していた宮崎康平^{みやざきこうへい}。彼は昭和十年代に早稲田大学で津田^{つだ}左右吉^{さうきち}に師事し、津田教授への思想弾圧を目の当たりにした経験もあり、「邪馬台国」を生涯の研究テーマにする郷土史家だった。「畿内説」が優勢ななかで少数派の「九州説」に立ち、『魏志倭人伝』に記された邪馬台国への行程を、『古事記』や『日本書紀』と照合する地道な研究に心血を注いだ。

しかし、その研究途上で失明。以後は妻の助けで、資料の読みこみ、口述筆記による論考作成にあたった。この論考が『九州文学』に連載されていたのを第二出版部の部員が発

掘して刊行にこぎつけた。

この本の出版を機に、松本清張の『古代史疑』（中央公論社刊）、高木彬光の『邪馬台国の秘密』（光文社刊）など、著名作家もあとにつづき、一躍「邪馬台国ブーム」を巻き起こして三十万部を超えるベストセラーになった。また、夫婦二人三脚での苦闘と情熱が評価され、優れた業績を上げながらも報われることの少ない人に贈られる「吉川英治文化賞」の第一回（昭和四十二年）を夫婦で受賞した。『まぼろしの邪馬台国』は平成二十年（二〇〇八）、竹中直人・吉永小百合主演で映画化されたから、覚えておられる方も多いだろう。

昭和四十三年（一九六八）には、一瞬の事故で下半身不随になった女性が、絶望の淵から自分を見つめなおし、人間としての存在の意義を獲得していくエッセイ『この生命ある限り』（大石邦子）がヒットした。

昭和四十四年（一九六九）に公刊された相沢忠洋の『「岩宿」の発見——幻の旧石器を求めて』は、民間アマチュア研究者の手記である。貧しくて上級の学校に進めなかった少年が、歴史と考古学への情熱を失わずに独学をつづける。長じて群馬県桐生市で行商人となった彼は、その行商の道筋にある遺跡に魅せられて、一人で何度も調査をくり返し、ついにある石器を発見する。その石器は、日本に旧石器時代が存在したことを確認する重要な手がかりとなり、彼の発見がアカデミズムの研究者も動かしていく。

また、この年には、のちに「ノーベル賞級の世界的文学」と評される石牟礼道子の『苦海浄土 わが水俣病』が加藤の手で刊行された。これは日本の出版界にとってエポックメイキングな事件なのでその経緯を少し詳しく説明しておこう。

岩波は石牟礼の原稿を拒んだ

ご存じのように『苦海浄土』は、有機水銀中毒に苦しむ水俣漁民の魂を描いた作品である。当時、水俣在住の主婦だった石牟礼の初稿が雑誌『熊本風土記』に「海と空のあいだに」という題で連載された。彼女と交友のあった福岡在住の作家・上野英信うえの えいしんがそれを読んで単行本にしようと思いついた。のちの石牟礼との対談（『石牟礼道子全集・不知火』第3巻所収、藤原書店刊）で上野はその時の心境を次のように語っている。

私は『苦海浄土』の初稿の掲載誌『熊本風土記』を読ませてもらって、はっと思っ
て、これをぜひとも本にして、できるだけ多くの人に読んでもらえれば、もうそれで、
自分は生きていたかがあったのだと思って、石牟礼さん、私にまかせてください、
と言ってね、原稿預かって東京へ行っただけです。どこの出版社がよかろうかと考えた
のだけれど、当時、岩波新書がまだ、百二十円ぐらいでしたから、岩波新書に入れて

もらえば、お金のない人でもわりに楽に買えるし、また、あの当時、石牟礼さんは今以上に生活に困っておられたし、岩波なら印税も間違いなく入るだろうし、少しでも石牟礼さんたちの仕事にプラスになればということ、岩波書店に持ち込んだわけです。そしてぜひ岩波新書にしてほしいと頼んだわけです。

当時すでに作家として名を成していた上野が「もうそれで、自分は生きていたかいがあったのだ」というのだから尋常な惚れこみようではない。岩波に持ちこんだ時期は定かではないが、『熊本風土記』の連載が昭和四十年（一九六五）十二月に始まり、同四十一年いっぱいづづいているから、おそらく翌四十二年のことだろう。上野がつづける。

ところが、いつまでたつても返事がない。どれくらいたちましたかね。半年、あるいはそれ以上かかったのではないかと思うのです。なしのつぶてなので、とうとう岩波書店に訪ねて行って、新書課長にどうなっているのか尋ねたところ、新書課長がたいへん気の毒そうな顔をして、原稿を私の前に置きまして、せっかくの上野さんの頼みだからできれば出版してあげたいのだが……。

上野によると、「新書課長」はつづけてこう言ったという。

当社は編集部員全員に回覧し、過半数の賛同をえたものを出版することにしていきますが、お預かりした原稿は、小職を除いて一名の評価もえられませんでした。

〔担ぎ屋の弁〕『上野英信集（戦後文学エッセイ選12）』所収、影書房刊）

「戦後日本文学を代表する傑作」という後年の評価を知るわれわれからすれば、にわかには信じがたいような話である。なぜ、岩波は石牟礼の原稿を拒んだのだろうか。無名の主婦が書いたものは出版に値しないという判断があったのだろうか。

これが理解できないようでは……

上野の説明によれば、岩波というのは妙に「量の民主主義」みたいなところがあって、新書なら新書の編集部員の過半数か、何パーセントかが、これはいい作品だと賛成しなければ、いくらこの本を出したいと思ってでも出せないのだそうだ。

「新書課長」は、「一人でもこれはいい作品だからぜひ出しましょう、と言ってくれれば、私もなんとかご期待にこたえられたと思うんですが、お気の毒ながら一人もこの原稿を評

価値する人間がいらない。そうになると、課長の独断でこれを出すことはできない」と言ったという（石牟礼との対談）。

上野はこれを聞いたときの気持ちをこう語っている。

岩波にしてもこの作品はわからんのだな、と言いやうのないむなししい気持ちでした。そのへんがやはり、岩波文化といっってはわるいけれども、日本のいわば既成の出版アカデミズムといったようなものの限界を示しているような気がする。

上野の言う「岩波文化」とは、知的エリート向けのアカデミックな出版活動を指す言葉で、戦前に一世を風靡した庶民向けの「講談社文化」との対比で使われることがあった。

上野がここで言いたかったのは、編集者がふだんから著名大学教授の権威をバックに仕事をしていると、無名の主婦が地の底を這いずりまわるようにして書き上げた作品の価値がわからなくなるといふことだったろう。上野は対談でこうも語っている。

ただ、『苦海浄土』の原稿を岩波に持ち込むまえに（水俣生まれの民俗学者で歌人の）たにがわけんいち谷川健一さんに相談しました。谷川さんが言うには、岩波新書として出ればいちばん

いいけれども、この石牟礼道子の原稿をはたして岩波が理解して受けつけることができるかどうかそこは問題だ、ぼくの考えるところでは非常にむずかしいのではないかと思う、といみじくも言われましてね。私はそんなバカなことはない、これが理解できないようでは、なにが岩波だ、というように思っただけ私はまだそのころは岩波を信頼していた。それだけに、私は、さすがは谷川健一さんであると、彼の見る目の確かさに敬服しました。

石牟礼はそれに対し「私の書くのはなにかやっぱり非常におかしいのですよ。スーッと入りにくいところがあるのでしょね。私自身が自分でもなにがなんだかわからないみたいなところがありますし、文体もこの世になじまないのですよ、きつと」と応えている。

打って変わって

上野は岩波新書をあきらめ、講談社の加藤に原稿を持ちこんだ。その際、加藤との間でどんなやりとりがあったのか、記録がないのでわからない。

米本浩二の『評伝 石牟礼道子——渚に立つひと』（新潮文庫）によると、昭和四十三年（一九六八）六月二十一日、水俣の石牟礼に上野から電報が届いた。

「コウダンシヤシユツパンキマツタ」オメデトウ アンシンコウ ウエノ

電報から二日後、上野から手紙が来た。講談社が出版を正式に決めた経緯をくわしく知らせてくれたのである。

石牟礼道子様

昨日はなんとも嬉しい日でした。町田まちだ行幸みゆきさん（講談社学芸二課）から電話がかかって「いま企画会議が終ったところですよ。出させていただくことに決まりました。もうかつて、もうからなくても、とにかく出すべきものだからという重役の意見で」という報知。嬉しくて嬉しくてさっそく真つ昼まからビールで乾杯。飲んで飲んで飲みつづけ、夜には千々和英行さん（魚住註…上野の親友）も呼んで祝賀会。今日は二日酔いの気味です。来週には町田さんから詳しい連絡の手紙がゆくと思えますが、少し枚数がたりないそうですから、市民会議のことなど、少々「運動」面にふれた部分をかきこんで一応のまとめの章にしてはどうかと思えますが。万事よく町田さんと打合わせて、一日もはやく出版になるよう、最後の努力をしてください。とにかく、こんな大切な

記録はないのですから、一人でも多くの人に読んでもらいたいものです。

それから五カ月後、十一月二十五日の消印で上野から石牟礼に葉書が届いた。

先日、上京中、講談社に寄りました。あなたの原稿が全部入ったとて、加藤課長（魚住註…加藤部長の誤り）も吉田女史（魚住註…寿退社した町田行幸の後任編集者とみられる）も、とても喜んでいました。私もほっと胸をなでおろしました。なんだかゴーカンしたみたいで、苦しい思いですが、どうぞお許してください。

「海と空の……」というタイトル、一考を要すると思います。独立した一冊の記録のタイトルとしては、少々イメージが弱い感じですが。もうひとふんばり、考えてみてはどうでしょう。とにかく、一月を楽しみにしております。

（米本浩二『魂の邂逅——石牟礼道子と渡辺京二』新潮社刊より引用）

『苦海浄土 わが水俣病』は昭和四十四年（一九六九）一月、講談社から発行された。のちに評伝作家の米本浩二が『苦海浄土』という題はどなたの命名ですか」と尋ねると、石牟礼は「私と上野さんとウチの先生（夫の弘）の三人で決めました。上野さんが『苦海』

を提案し、「苦海であれば浄土はどげんや」とウチの先生が言う。面白い。決まるのに五分もかかりませんでした」と答えたという。

公刊直前の昭和四十三年十二月十八日、石牟礼の日記には「上野さんよりデンポウ。デ
ンワかける。講談社、「販売部がホレて」「苦海浄土」にきまつた由」と記されている(『魂
の邂逅』より引用)。講談社では編集だけでなく販売の担当者までもが『苦海浄土』の出版を
心待ちにしている様子がうかがえる。

岩波と打って変わった講談社側の好意的反応はなぜ生じたのだろうか。それはひとえに
作品の魅力のなせるわざにはちがいないが、一方で、それまで地方の埋もれた才能を発掘
してきた加藤の実績によるところが大きい。無名の著者でも、加藤が推すものなら間違
ないのだという信頼感が社内に行き渡っていたのだろう。

大宅賞受賞辞退と朝日の誤報

昭和四十五年(一九七〇)春、『苦海浄土 わが水俣病』は第一回大宅壮一ノンフィクション賞(文藝春秋主催)に選ばれた。選考委員の開高健かいこうたけしは「患者と添寝そいねせんばかりにして九州方言の話しことばで書きつづった部分に抜群の迫力がある。白眉である。そくそくと迫つてくる凄惨の異相のなかに鮮烈で透明な詩も閃いている」と評し、同じく選考委員の臼井うすい

吉見も「著者の水俣病追求は、ひたむきで鋭く、全身的であって仮借するところがない」と絶賛した。

しかし、石牟礼は受賞を辞退した。「選考経過」によれば、石牟礼は「わたし一人が頂く賞ではありません。水俣病で死んでいった人々や今なお苦しんでいる患者がいたからこそ描くことができたのです。わたしには晴れがましいことなど似合いませんのでお断りします」と述べた。加藤は彼女を翻意させるべく、「だいぶ説得したんだけれども、どうしても申し訳ないからといって、辞退しちゃった」と「七十年史資料」で語っている。

それからまもなく、ショックな事件が起きる。同年三月二十七日の朝日新聞夕刊一面下のコラム「今日の問題」に次のような記事が載ったのである。

この本（『苦海浄土』）が、文芸春秋社の第一回大宅壮一ノンフィクション賞に選ばれた。しかし彼女は受賞を辞退した。（中略）

文芸春秋社は、正賞相当額を、患者家庭互助会に寄付するという。大宅壮一賞は、辞退されはした。しかし、この本を選んだことによって、第一回の輝きを得た。文芸春秋社が、最大の商売がたきである講談社の本を選んだことも立派だ。

つぎは講談社の出番だ。この本は、昨年一月発売された。すべての書評が絶賛して、

たちまち店頭から消えた。そしてそのままである。天下の講談社が、いまはやりの出版妨害を受けたり、自主規制したなどは考えられない。

文春社から贈られた栄誉を、全国民に還元すること。それが出版業が文化事業であることの証明となろう。この本を、一円でも安く、一人でも多くの人に読ませるようすること。(後略)

はつきりとは書いていないが、講談社がなんらかの圧力を受けて『苦海浄土』の増刷を見送り、その結果、店頭に出まわらなくなったと暗示する記事である。このころ創価学会の言論出版妨害事件が世間を騒がせていたから、同じような圧力に講談社が屈したのではないかと記者が邪推したのである。根も葉もない憶測記事である。

実のところ、公刊当初『苦海浄土』の売れ行きは芳しくなかった。そのため、売れ残りが書店から講談社に返品され「たちまち店頭から消えた」ように見えたのである。「七十年史資料」で加藤はこう証言している。

いい本だけど、最初あれ(『苦海浄土』)は売れなかつたんだよ。そうしたら朝日新聞に「あれは(講談社が)自主規制して増刷しないんじゃないか」と書かれた。僕は「こ

んなことがあるかっ！」と（朝日新聞の）論説委員室へ乗り込んで、（筆者の）笹山とかいう人に「あんた、ちゃんと調べたのか」と言ったら「いや、書店を三軒くらい回ったけれども『苦海浄土』が店頭になかった」というので、僕は「ないと言ったって、売れなければ返品ということもあるんだ」ということをギューツと言った。そうしたら「じゃ投書欄をあげるから（そこに言い分を書いてくれ）」と言う。それから『週刊朝日』にも（加藤の言い分を書く欄を）ふつうよりちょっと大きくやるといっているので、僕が（その原稿を）書き始めたなら、社内のある人が「そんな大人げない喧嘩をするな」なんて言い出して、だいぶ誤解されたからシヤクなんだけれどもさ。

この口ぶりから察すると、加藤は反論文の掲載を途中であきらめたらしい。記事のせいで加藤は講談社の組合大会に呼ばれ、そこで釈明する羽目になった。編集者にとってこれほどの屈辱はなかったろう。しかし、世の中、なにが幸いするかわからない。

大宅賞の受賞辞退と朝日の“誤報”騒動が重なって世の注目を集めたため、『苦海浄土』の売れ行きは俄然よくなり、最終的に約十萬部のベストセラー入りを果たした。

『苦海浄土』の出版は加害企業の責任追及と患者の全面救済を求める世論の原動力となった。やがてミナマタは地球規模の反公害運動の代名詞となり、講談社の出版活動は世界で

評価された。かつての加藤の「辞表を出すより、何か講談社でなければ出せないようなもの、講談社なればこそよく出したといわれるようなものを出したい」という願いはここに結実したと言っていていいだろう。

2 新書という器とその読者

岩波新書の誕生

さて、前置きが長くなったので、そろそろ本題に向かおう。「いかにして現代新書になったのか」と銘打つからには、現代新書の現代的意味を語らなければならぬのだが、そのためにはまず第一に、新書という出版形式が生まれた経緯を説明しておく必要がある。

ご存じと思うが、日本で最初に「新書判」(タテ約一七センチ、ヨコ約一一センチ。当初は軽装版と呼んでいた)のシリーズを刊行したのは岩波書店である。

発刊計画が持ち上がったのは昭和十二年(一九三七)秋ごろ、同年七月の盧溝橋ろこうきょうでの衝突から日中戦争が勃発し、戦火が上海シャンハイから南京ナグキンへと拡大してゆく最中だった。それは惨憺たる敗戦に至る道だったのだが、そのころそれを見抜いた人は数えるほどしかおらず、世論は

はつきりと軍国主義の波にさらわれていった。

岩波書店の編集者・吉野源三郎（岩波文庫『君たちはどう生きるか』の著者）は日中戦争で浮き足だった新聞の記事を毎日見ながら、日本の行く末に暗澹たるものを感じていた。そして「とにかく私たち日本人は、この現実を直視しなければならぬ。そのためには、何よりもまず、日ごとにつのる偏狭な国粹主義の思想に抵抗しなければならぬ」と考えた（吉野『激動の中で——岩波新書の25年』より）。

そんなとき、丸善の棚で目にとめたのが、英国で創刊されたばかりのペリカン・ブックスである。バーナード・ショウの『社会主義入門』、レオナード・ウーリーの『過去の発掘』、ジェイムス・ジーンズの『神秘的宇宙』……吉野はそれらを買って帰り、読んでみて感心した。やさしい言葉で説かれていても、けっして調子は落としていない。考古学や天文学の通俗的な解説であっても、ちゃんと学問的探求のおもしろさを伝えていて、学問以外の興味で釣ってゆくような卑俗さは微塵もなかった。

……値段もころあいだし、型がスマートでハンディーだし、分量も読み切るのに手頃で、書目も哲学、歴史、考古学、自然科学など多方面にわたって、かつ専門家でない読者にも興味の深いものが揃っている、——この形式ならば、俗流に陥らないで

多数の読者をつかめるのではないか、と私たちは新鮮な刺戟と示唆とをこの双書から受け取りました。

(同右)

吉野は日本版ペリカン・ブックスを刊行することで「国民の間に科学的な考え方や世界的なものを見方を広め、中国に対する日本の軍事行動を反省し批判する資料を提供しよう」(吉野『職業としての編集者』)と思い立ち、同僚の小林勇や哲学者の三木清の協力を得て、翌昭和十三年(一九三八)十一月、岩波新書の創刊にこぎつけた。

このとき店主の岩波茂雄は「刊行の辞」に発刊の目的として「現代人の現代的教養」を掲げた。従来の岩波文庫が古典中心なのに対し、岩波新書は今の課題に取り組むという意思表示である。小林勇の『惜櫟莊主人』によると、岩波は「今度のやつは今の問題を、今の人に書いてもらうのだ。大体寿命はあまり長くなってよい。生き生きした問題を掴まえるのだ」と、くり返しくり返し自分を納得させるように言ったという(鹿野政直『岩波新書の歴史』岩波新書を参照)。

第一回は、「奉天の聖者」といわれた医師クリスティーの『奉天三十年』(矢内原忠雄訳、上・下)、齋藤茂吉『万葉秀歌』(上・下)、津田左右吉『支那思想と日本』など二十冊が一斉発売された。これらは発売と同時に大変な歓迎を受け、たちまち版を重ねた。

以来、戦争の激化による一時休止をはさんで岩波新書の刊行はつづき、昭和六十二年（一九八七）時点で総売上部数一億八千万部、刊行点数千四百八十八点。一点あたりの平均売上部数は約十二万部。直近の年間売上部数における新刊と重版の比率は、新刊四五・五パーセント、重版五四・五パーセントであった。これらの数字がどれほど驚異的なものか、昨今の出版事情をある程度ご存じの方はわかりだろう。岩波新書が「新書の王」と呼ばれる所以である。

カッパ・ブックスの大躍進——加藤秀俊の鋭い分析

敗戦から九年後の昭和二十九年（一九五四）、岩波の独り舞台だった新書の世界に変化が起さる。中央公論社がハードカバーで出していた伊藤整『女性に関する十二章』の廉価版を新書判で刊行したところ、三十万部を超えるベストセラーになった。それを契機に各社が新書を創刊しはじめた。「第一次新書ブーム」の始まりである。

なかでも講談社系の光文社で神吉晴夫（講談社の創業者・野間清治の薫陶を受けた編集者）が手がけたカッパ・ブックスは、わかりやすさに重点をおいた文章と大量宣伝などで人気を呼び、岩田一男の『英語に強くなる本』、塩月弥栄子の『冠婚葬祭入門』、多湖輝の『頭の体操』など実用・娯楽もののベストセラーを続出した。

カップの躍進に着目したのが、社会学者の加藤秀俊かとうひでとしである。彼の論考「日本の新書文化」(昭和三十七年六月四日〜五日の東京新聞掲載)によると、同じ新書でも本家本元の岩波とカップは対極をなしている。岩波新書が「永遠にして普遍という長期的なアカデミズムの発想を『縮小』してできあがっている」のに対し、カップは「昨日今日、という、ごく短期的なジャーナリズムの発想を『拡大』してできあがっている」。

両者の関係は「上り列車と下り列車のごときもので、出発点が元来ちがうのである。カップと岩波新書は、その判型もネダンも似ているが、まったく逆方向からあゆみよって、その類似性はうまれた」。

戦後、講談社から分かれて独立した光文社は、講談社的発想を受け継ぎながら戦後の状況に反応してカップをつくり、岩波新書と対抗する地歩を築いてきた。その結果、戦前、講談社文化対岩波文化というかたちで、際だったコントラストを示していた「日本出版界の二潮流」は、いまやカップ・ブックス対岩波新書というかたちで現れている。

しかし、「かつての講談社対岩波はまったく水と油のごとく、とけあう部分をもたなかった。それとくらべれば、こんにちのカップと岩波新書のあいだには、それほど大きな異質性は存在していない。なるほど叙述のスタイルなどはだいぶちがうが、それぞれのシリーズの何冊かは、表紙をとってしまつたら、カップか岩波か判定がつきかねるほどに、

両者は接近してきている」と加藤は言う。

戦後の社会では岩波的な高級文化と、講談社的な大衆文化の接近が起こり、双方の文化的な落差が小さくなったというのである。加藤は「日本の新書文化」をこう締めくくる。

わたしは、カッパと岩波新書を上り列車と下り列車にたとえた。それぞれは、それぞれの使命をもっている。正面衝突したのでは何にもならないし、互いに無視しあつてよそよそしくスレちがうのも日本の文化にとってさびしいことだ。大事なのは、スレちがいにかいしての相互の交流だ。両者の接近から、「新書文化」が前向きに定着するかどうか、それは主として、このスレちがい技術にかかっている、とわたしはみる。

こう書いたとき、加藤の胸に、まもなく誕生する中公新書への期待があつたのはまちがいないだろう。

中公新書創刊

加藤秀俊は中公新書の創刊に深くかかわっている。次は、加藤が当時を回想したエッセイ「創刊のころ」(『中公新書総解説目録 1962〜2012』所収)の書き出しである。

京都太秦うずまさの垂箕山たるみに住んでいたころ、坂道をゆつくり登って宮脇俊三みやわきしゅんぞうさんが我が家
においでになった。あたたかい日差しひざしの気持ちのいい日だったから、たぶん一九六二
年早春のことだった、とおもう。

宮脇はのちに『時刻表2万キロ』（河出書房新社刊）など鉄道紀行の作家として知られる
ようになるが、当時は中央公論社の辣腕編集者だった。一方の加藤はこのころすでに雑誌
『中央公論』の常連寄稿者になっていた。ふたりは顔なじみで、気楽に話し合える間柄
だった。

だが、その日の宮脇の用件はたいへんなものだった。その年の秋から「中公新書」を出
版することになったので、巻末に掲げる「刊行のことば」を書いてくれないかという依頼
である。

加藤は驚いた。常連寄稿者といっても彼は当時三十二歳のヒョッコ。京大人文科学研究
所の助手にすぎない。そんな人間に、伝統ある出版社が、長期にわたってどの一冊にも印
刷される文章をまかせるといふのだから、破天荒なできごとといわねばなるまい。

加藤は逡巡しゆんじゆんしたが、宮脇と話を交わすうち引き受けることに決めた。この執筆依頼が

宮脇のアイデアというだけでなく、背後に社長の嶋中鵬二しまなかほうじをはじめ中央公論社の強い意志が働いていることが明白だったからだ。このとき中央公論社には、中公新書で巻き返しをはからなければならぬ事情があった。

というのも、それより三年前の昭和三十四年（一九五九）、中央公論社は『週刊コウロン』を創刊した。定価は三十円が常識のところ、後発週刊誌なので二十円とし、表紙も『週刊新潮』の谷内六郎たにうちろくろうに対抗して棟方志功むなかたしきこうに依頼した。だが、安い定価は書店や駄売店の不売運動を招き、棟方志功の表紙も「毎号の印象が変わらない」と不評を買って、売り上げ不振となり、二年後に休刊に追いこまれた。

そこで問題になったのが『週刊コウロン』創刊時に採用した大量の社員たちである。休刊となった今、それらの社員の仕事をやらねばならない。その方策のひとつが新書の創刊だったというわけだ（『中公新書の60年』所収の「物語 中公新書の歴史」より）。

ただ、中公新書の位置づけをどうするかは尋常な問題ではなかった。「新書」と名乗るにあたっては、それに先行して確乎たる地位を確立していた岩波新書を意識せざるをえないからだ。あきらかに後発である。いったい、どこで岩波との「種差」をつけるか、どこに特徴を出していったらいいのか。そのことを加藤は宮脇とあれこれ語りあった。そして意見が一致したのは「観念論」を排除することだったという。

さいわいなことに、わたしは宮本常一みやもとつねいち、今西錦司いまにしきんじの両先生を深く敬愛して生きてきた者である。おふたりとも抽象的な書物をつうじての学問よりは具体的な体験的事実を思索の出発点となさっていた碩学せきがくである。その「事実」を重くみることをこのあたらしい新書の特色にしたい、とおもった。学者というのは、えてして「本から本をつくる」傾向がある。はなはだしきは外国の本の紹介でお茶をにごすことを学問だと錯覚しているひともある。わたしは学問というものは生きた人間がそれぞれの背景にある知識をしつかりとおさえながら、それを事実と経験によって「わたし」という一人称で語るものでなければならぬ、とかんがえていた。いまもその信念にかわりはない。

(一 創刊のころ)

中間文化論

ここでちよつと補足しておきたい。加藤の言う「観念論」とは、当時の論壇で支配的だったマルクス主義的イデオロギーのことである。それに対して加藤は、生活実感を重視するプラグマティズムの立場をとっていた。と言ってもわかりにくいだろうから、彼の自伝『わが師わが友——ある同時代史』（中央公論社刊）から実例を引いて説明したい。

戦後の論壇では、マルクス流の労働疎外論が主流を占めていた。労働疎外論とは、ベルトコンベアによる大量生産システムの導入で、労働者は機械に苦役を強制され、ただ資本家に富を蓄積させるだけの非人間的存在になり果てるといった見かたである。

ところが、加藤が『思想の科学』研究会を通じて出会った独学の映画評論家・佐藤忠男さとうただお（若いころ工場労働者だった）は、自分の体験から、この労働疎外論を全面否定した。そして、工場労働者にすれば、疎外の元凶とされるベルトコンベアのほうがどれだけ便利かしれないと言った。

加藤はその言葉にハツとし、工場でレンチを持って働いたことのない人間が書齋のなかで「疎外」を思索するのも結構だが、佐藤のように、油にまみれて機械を相手に働いている人の「実感」のほうがずっと大事だと思ったと記している（竹内洋たけうちひろ『大衆の幻像』中央公論新社を参照）。

ことは労働疎外論にとどまらない。戦後社会をどう見るかという根本的な点でも加藤は論壇主流と食い違った。これは、二年後に創刊する講談社現代新書の方向性にも深くかわることなので留意してほしいのだが、加藤は彼の出世作「中間文化論」（昭和三十二年、『中央公論』に掲載）で戦後社会の動向について画期的な問題提起をしている。

それまでの論壇では、労働者対資本家の階級闘争を基軸とする世界観が支配的だった。

ところが加藤は、あらたに戦後社会の前面に出て来たサラリーマンなどの中間層に注目した。彼らが担う中間文化——それは戦前の岩波的な高級文化と講談社的な庶民文化が接近して生まれたものだ——が今後の社会の動向を左右すると説いたのである。

中間文化を生んだのは、なんといっても教育レベルの底上げだ。「とくに文盲率が世界一低いわが国では、ほとんどすべての人が相当に複雑なシンボルの操作ができる下地がある。そこに新学制がひかれたおかげで、これからの世代は少くとも中学卒業生という知的レベルを中核として育っているし、新制高校卒業生も掃いて捨てるほどたくさんいる。大学を出たといっても昔ほど幅は利かない」と加藤は言う。

つまり、戦前の文化構造は知的エリートの高級文化と、庶民の大衆文化の間に断層のある「ひょうたん型」だったが、戦後は高級文化でも大衆文化でもない「中間文化」がふくれあがって「ちょうちん型」になった。中間文化はサラリーマンだけでなく、労働者・農民に浸透して「あたらしい国民文化、大衆文化の原型」になった。

加藤は、中間文化が導く社会の未来に希望を感じた。そして「中間層をプラスの方向に働かせることが、現在、もっと真剣に考えられなければならない」と訴えた。その牽引車として彼が期待をかけたのが中公新書なのである。

「事実」と「読みやすさ」を重視して

では、具体的にどのような新書を作るか。中央公論社内部で検討が進んだ。新書の代表格である岩波新書は学術的・論壇的志向が特色だったし、カッパの特徴は実用性にあった。当時三十四歳の部長だった宮脇俊三の下に集まった部員たちは、まず岩波新書とカッパ・ブックスを全部買ってきて、両者の特徴を分析することから始めた。

しかし、どんな路線で行くか、一日おきに会議をしたが、議論は百出し、いつまでたっても意見はまとまらない。しまいには「部長の司会がへただから」という部員や「会議の進め方について」という刷り物をくぐる部員も現れる始末だった。

それでもしだいに方向性は定まってきた。そのひとつが「事実の重視」であった。これは加藤のいう「観念論の排除」とともに、歴史的事実の追求という意味合いが含まれる。

もうひとつは「読みやすさの重視」である。どんなにすぐれた内容でも読んでもらえなければ話にならない。無味乾燥な教科書ではない、読みものを目指すことにした。

ただ、「読みやすさ」についてはすでに二年前に刊行を開始した全集『世界の歴史』（全十六巻別巻二）で力を入れていた。この編集担当の責任者も宮脇俊三だった。

『世界の歴史』で、著者に原稿を依頼するとき渡した「執筆要項」が「物語 中公新書の歴史」に載っている。少し長くなるが、極めて興味深いので、一部をそのまま引用する。

4 一般の興味をそそるような事項は、それをもとにして当時の特徴を描くようにし、その事項が世界史上にもつ重要度以上のスペースをさく。(そのために、重要ではあるがあまり興味津々とは言えない事項のスペースが削減されてもやむを得ない) イ、現代人には奇異に思われる制度で、その当時の政治・社会の性格をよく表わしているものは、くわしく書く(初夜権など)

ロ、新聞の社会面に出るような事件も適宜挿入する。

5 王朝の興亡、政権の変転、民族の移動、各地での戦闘、制度の変革、経済の消長などは詳細に記述せずに、できるだけその時代の特色を理解させるようにする。つまり細かい事実を列挙せず、一例をあげるにとどめ、むしろパターンを示す。

※これは読者の立場から強くお願いしたいところです。専門家にとっては非常につらいところとは存じますが、どうか必要事項の大半を削ってでも強行して頂きたく存じます。

6 社会経済史の蔭かげに埋まってしまうた「人間」を掘り出す。

ハ、人物に親近感を抱かせるようなことはつとめて書く。(日常的性格、肉体的特長、持病、奥さんのこと、アダ名、エピソード等々)

※こうすれば、固有名詞がおぼえられます。

二、動詞には、できるだけ副詞などの説明的語をつける（単に「殺された」でなく「焼き殺された」とか「行つた」でなく「馬に乗つて行つた」など）

この方針は監修者のひとりだった池島信平（西洋史の専門家でもあった）の影響が大きかった。池島は当時、文藝春秋新社の編集局長。中央公論社の全集に協力したために「どこの編集局長だ？」と軽口を叩かれたというが、『世界の歴史』の執筆者を集めた会で「西洋史はじつにおもしろい。しかるに諸君が書くと、まったくつまらなくなってしまう。この企画ではおもしろい話をどしどし書いてもらいたい」と述べたという。

池島が徹底した「読みやすさ」は、中公新書でも大きな柱となった。創刊時にはまず著者に「まえがき」を書いてもらい、それを編集部内で回し読みし、なんども書きなおしてもらつたという。

堂々たるマニフェスト

こうして中公新書は昭和三十七年（一九六二）十一月、発刊した。第一回のラインナップは、桑原武夫編『日本の名著——近代の思想』、会田雄次『アーロン収容所』、加藤一朗

『象形文字入門』など五冊だった。第二回は「私のとっておきの球」だと宮脇がいう三田村泰助たいすけの『宦官かんがん』など三点、第三回は吉田光邦よしだみつくにの『錬金術』など三点、第四回は宮崎市定みやざきいりさだの『科挙かきう』、貝塚茂樹かいづかしげきの『史記』、そして加藤秀俊の『整理学』など四点で、いずれも好評を博し、中公新書は歴史系に強い新書として出版界に確乎たる地位を築いていく。

宮脇俊三の依頼に応えた「刊行のことば」にはこうある。無署名ではあるが加藤秀俊による明確かつ堂々たるマニフェストである。

私たちは、知識として錯覚しているものによってしばしば動かされ、裏切られる。私たちは、作為によってあたえられた知識のうえに生きることがあまりに多く、ゆるぎない事実を通して思索することがあまりにすくない。中公新書が、その一貫した特色として自らに課すものは、この事実のみの持つ無条件の説得力を発揮させることである。現代にあらたな意味を投げかけるべく待機している過去の歴史的事実もまた、中公新書によって数多く発掘されるであろう。

それは岩波新書と同じ学術教養路線を歩みながら、「観念論」に陥らず、カップのように「通俗的好奇心」に訴えることもない、「真に知るに価いする知識だけを選びだして提供す

る」ことを誓うものだった。

足澤禎吉と講談社の苦境

のちに講談社の副社長となり、日本映画史に残るドキュメンタリー「東京裁判」の総プロデューサーともなる足澤禎吉は、少年部員のころから粘りと根性の努力家だったらしい。その仕事ぶりを創業者の野間清治夫妻が目に見え、「足澤はきつと大物になるよ」と期待を寄せたという。

戦争中、足澤は陸軍の航空兵としてニューギニア戦線に送られ、飢餓に苦しみながらトカゲやネズミを食べて生き延びた。現地の捕虜収容所に入ると、米軍の通訳に頼みこんで英語を教えてもらい、帰国後も英語学校に通って磨きをかけた。

英語だけではない。どこでどう身につけたのか、足澤は古今東西の宗教・哲学に通暁するクリスチャンだった。これは亡くなった後のことだが、東大名誉教授でインド哲学者の中村元なかむらはじめが自身の学究生活を振り返るなかで次のような思い出話を語っている。

（私が書いた『世界思想史』の）英語版がありまして、講談社インターナショナルで出して下さいました。それをやっていた方は足沢禎吉という（講談社の）副社長の方です。

学者といろいろな企画や相談をする。私も何遍も会ったことがあります。堂々と応対しているのです。だから大学を出た人だと思ったら、後でお葬式に行ってみて学歴を伺ってびっくりしたのです。小学校を出ただけだということです。それでも勉強している人は学問的な分野で優に学者と応対できるということです。

そんな足澤の人生に分岐点があったとしたら、昭和三十七年（一九六二）春、講談社の業務部長だったときのできごとだろう。中公新書創刊の半年あまり前のことである。

そのころ講談社は苦境の最中にあつた。最大の原因となつたのが、学年別学習雑誌の不振である。

学年誌の分野では、大正期以来の歴史をもつ小学館の『小学一年生』～『小学六年生』が、戦後のベビーブーム世代の入学とともに部数を伸ばし、昭和二十九年（一九五四）一月号の『小学一年生』が発行部数六十万部、実売五十三万九千部に達した。

それに対抗しようと、講談社は昭和三十一年（一九五六）から『たのしい一年生』～『たのしい六年生』を順次創刊し、大規模な攻勢をかけた。だが、小学館の圧倒的シェアを切り崩せず、ついに小学館の部数の半分にも届かなかった。その差は年を追うごとに広がって、赤字が累積していった。

僕みたいなズブの素人にどうしてやらせるのかな

このままにも手を打たなければ、社の存亡にかかわりかねない。野間省一は業務部長の足澤を呼び、学年誌を統括する学習編集局の局長になってもらいたいと告げた。足澤にとっては寝耳に水の話である。

足澤は、戦後に復職して以来、一貫して資材畑を歩んできた。物資不足のなか、用紙の調達などに手腕を発揮し、業界で「鬼よりこわい足澤」「足澤天皇」と恐れられた。が、編集の仕事はいつさいしたことがない。ズブの素人になにをさせようというのか。

足澤はウンと言わなかった。それでも野間は「奥さんと相談してみてください」と言った。妻は、翻訳家・児童文学作家の足澤良子よしこである。仕事柄、講談社の内情にも通じていた。

足澤が帰宅して良子に事情を説明すると、「あなた、できるわけないから、絶対に断りなさい。あなたはどうせ断りにくいだろうから、私が行って断りますよ」と答えた。

野間にそれを伝えると、「うん、そうだろうな、それじゃ奥さんと呼んでくれ。ぼくが奥さんを説得するから」と言った。それで、足澤は「そんなこと言わなかったって、自分の家内は自分で説得しますよ」と答えざるをえなくなかった。

「七十年史資料」に残された足澤本人の回想。

なんとなく僕も優柔不断なところがあるんだな。断るなら、本当に断ってしまえばよかつたものを、何だかんだ言っているうちに引き受けざるを得なくなつて、そのうち辞令が発令になつちやつた。社長は「学年誌は）人間の体でいえば、ガンである。ちよつとやそこらの腫れ物とか、風邪を引いた程度の病氣ではない」と言うんです。ガンなんだから、どうしても治らないものを、僕みたいなズブの素人にどうしてやるせるのかな、これは本当にエライことになつたなと思つた。

たしかに足澤には迷惑この上ない人事だつたらう。

講談社始まつて以来の大撤退

だが、野間は足澤の能力を誰よりもよく知つていて、足澤の力を借りなければこの難局は乗り切れないと思つたらしい。これは少しあと、足澤が重役になつてからの話だが、社史『物語 講談社の100年』にこんなくだりがある。

野間社長と足沢の間柄は、当時を知るものの間では半ば伝説的に「黄金コンビ」と

して記憶されている。重役会議で各役員が甲論乙駁の議論を闘わせ、結論はどこにどう落ち着くかの目途もつきがたいとき、絶妙の頃合いで社長が、「足沢くん、君はどう思う？」と、バリトンの声を響かせる。すると、「私は賛成ですね」と、足沢のやや東北訛りの愛嬌のある声がそれに応え、「そうか、じゃあまあ、やってみるか」と鶴のひと声がかぐだつて議論が決着するのだった。またあるときは、足沢のほうから検討案件を切りだし、熱のこもつた説明が展開される。やがてじつと耳を傾けていた社長が、「君にまかせよう。良いと思うことならどんどんやりなさい」と、信頼しきつた顔で承諾を与える。そうしたようすを見た者は誰もが、二人の間の絆の強さに感嘆した。

話は戻って、足澤が学習編集局長を引き受けたとき、野間は「努力をしてもどうしてもダメだったらやむを得ない。いわゆる立て直し方策を考えてみてくれ」と言った。

その言葉を受け、足澤がさまざまな角度から立て直し策を検討した結果、たどりついた結論は『たのしい幼稚園』から『たのしい六年生』までのすべての学習誌をやめること。もうひとつの案は、比較的順調な『たのしい幼稚園』だけを残すことだった。

足澤の回想。

ただ、(編集現場に)行ってみると、編集に携わっている人たちが大勢いるから、やめるといふ案は、人情的にいつてとても実施できるものではないと思つた。本当にあのときは僕の人生の中で一番つらい時だつた。床につくとすぐ寝るんだけど、三時間くらいすると、あと夜明けまでいろんなことを考えて全然眠れないわけ。ノイローゼと
いうのはこういう状態でなるんだらうなと思つて、目を閉じていた。それが半年くらい続いた。

その年暮れ、野間以下全役員と足澤らが出席した会議で、『たのしい幼稚園』を除く学年誌を翌年三月号で休刊することに決まつた。講談社始まつて以来の大撤退である。

足澤はそのとき「もう二度と編集者のあんなつらそうな顔を見たくない。以後、彼らに決してあんな思いをさせちゃいかん」と肝に銘じたという。

岩波にばかり学術的なものを奪われている必要はないじゃないか

学年誌の一斉休刊で『たのしい一年生』〜『たのしい六年生』の編集部も解散した。

ある者は、近く創刊される雑誌『ヤングレディ』に吸収され、ある者は科学技術啓蒙の新シリーズ「ブルーバックス」の創刊メンバーとなつた。『たのしい一、二年生』の編集長

だった山本康雄は局内に残り、新設の学習図書出版部（のち学習図書第一出版部）の部長になった。

足澤はその山本に「講談社でやってないことはなんでもやれ。とにかく企画を立てろ」とハツパをかけた。喫緊の課題は、学年誌で苦汁をなめさせた山本やその部下ら八人の新たな仕事を作り出すことだ。そして彼らに二度と同じ思いをさせないことである。

山本はニチボー貝塚バレーチームの監督・大松博文に注目した。大松のチームは昭和三十七年（一九六二）、モスクワの世界バレーボール選手権大会で世界一の座につき、連勝記録を九十一にまで伸ばした。一方で大松は猛烈なしごきで「鬼」と呼ばれていた。

その大松を部員の朝倉光男（のち現代新書第三代編集長。取締役）が口説き落として作った新書刊『おれについてこい!』（昭和三十八年六月刊）が四十万部を超えるベストセラーになった。同じく新書刊の松本亨『新英会話入門』（同三十七年一月刊）の売れ行きも好調だった。

だが、単発的な企画だけでなく、なにか一本、どっしりと背骨をなす出版の軌道をつくる必要があった。他社を見渡すと、中公新書が順調な滑り出しを見せ、岩波新書は創刊以来五百点を超えています。好調だった。カッパ・ブックスの光文社は、新シリーズのカッパ・ノベルスを創刊して、松本清張の推理小説を登場させ、大幅にシェアを拡大していた。第二次新書ブームである。

そんななか、足澤の考えは岩波、中公につづく教養新書の発刊へと向かう。学習図書第一出版部の部員だった朝倉が当時の局内の空気を次のように証言している。

講談社はそれまで雑誌を中心にやってきたでしょ。少し硬いものをやろうと、足澤さんと山本さんで話し合いをしたんだと思います。それに講談社の将来を考えると、ある程度こちらの方面を開拓しておかないとダメだろうということになったんじゃないかと。もう一つには、当時新書時代で新書がすぐ売れていたんです。当時、岩波新書はほとんどベストセラーのトップです。それに続けということだったかどうかわかりませんが、硬いものをやろうと。ただ、企画会議ではラインナップが決まらないままやるわけですから、社内でもそれなりの人たちが書いてくれるならやろうか、という程度なんです。足澤局長がやるというんだから、やるしかないわけですよ。

（「百年史資料ヒアリング」より）

当の足澤は「七十年史資料」でこう語っている。前もってお断りしておくが、談話中に出てくる『雄弁』は、明治四十三年（一九一〇）、東京帝大の書記だった野間清治が緑会（法科の学生団体）弁論部の速記録をもとに創刊した講談社の第一号雑誌である。

(学習編集局で) 学術関係のものを意識的にやるようになったというのは、講談社はもともと『雄弁』から発足しているわけで、創刊号の目次や何かを見て思ったんですけども、本当にアカデミックなものなんです。講談社は『講談倶楽部』のイメージが強くて、やわらかいものばかりだと受け取られているけど、僕なんかも本当にそう思ったこともあったけれど、社史を見るとそうじゃなくて、もともと東大のアカデミックなものが主体に流れているのにびっくりしたんですよ。そこで僕が学習局長だったから、もつともつと学術的なものがあっていい。それならば岩波に対抗して、岩波にばかり学術的なものを奪われている必要はないじゃないかということで考えたのが、現代新書だったんです。

足澤は独学で宗教・哲学の研鑽を重ねるうち、自社の学術出版物の乏しさを思い知ったにちがいない。学習編集局長になってますますその気持ちが強め、「岩波にばかり学術的なものを奪われている必要はない」と教養新書の発刊を決意したのだろう。もちろんそれに、総合出版社を志向する野間省一の後押しがあったであろうことは想像にかたくない。

村井実 は語る

ただ、発刊までに克服すべき問題がいくつあった。そのひとつは、単なる岩波や中公の後追いではない、講談社独自のカラーをどう打ち出すかということだ。「読みものと雑誌の出版社」がなぜ教養新書を出すのかという疑問にも答えなければならぬ。

山本は学年誌時代に知り合った少壮の教育学者・村井実むらいみのる（慶大教授）を足澤に引き合わせた。村井はやがて現代新書の「刊行のことば」を執筆することになる人物で、以前から山本に「講談社も新書をなさったらどうですか」とアドバイスしていたらしい。

以下は、現代新書編集部による「創刊五十周年特別企画」の村井インタビューである。少し長くなるが、現代新書の基本理念を知るうえで不可欠な記録なのでじっくり読んでいただきたい。

村井 ……／私が講談社とかかわるようになったのは一九五〇年代の後半だったかな。当時、講談社も小学館の後を追って『たのしい一年生』『たのしい二年生』といった学年誌をやっていたんです。そこでかかわりができた。

でも、学年誌にしても、教科書にしても、学習参考書にしても、いろいろやっていたんですが、なかなかうまくいかなかった。

そこでなんとかしなくちゃいけないということ、『たのしい一、二年生』の編集長をやっていた山本康雄さん……が、私のところに相談に見えたんです。「どうしたらいいんでしょう？」と。二人でずいぶん議論をしましたよ。それで、どちらが言い出したのかははっきり覚えていませんけど、講談社も新書をやろうという話になったんです。

——新書というからには、そのとき先生の頭の中には当然、岩波新書の存在があったわけですよ？ 当時、新書という器を発明した岩波新書は、圧倒的なブランド力と存在感を持っていたと思うのですが。

村井 もちろん、それは念頭にありました。でも、岩波新書とは別のやり方があるのではないかと考えたんです。

古いワープロの中を探してみたら、現代新書創刊の前に山本さんに頼まれて、私が編集部で話した時のメモが出てきました。このメモには「講談社文化と岩波文化」というタイトルがついています。「岩波文化」という言葉はあるけど、「講談社文化」と言われても、ちよつとピンと来ないでしょうね。

私は自分の専門である教育に引きつけて、明治以来の日本の文化を、近代的な学校制度の導入をきっかけにした「岩波文化と講談社文化の絡み合いの歩み」として見た

ら面白いのではないか、と思ったのです。

岩波書店は岩波文庫や岩波新書や学術書において、戦争中から「大学」とびったりくつついていました。だから、戦後にわりあいスムーズに移行できた。それから小学館は『小学一年生』などの学年誌で「小学生」を対象にしていました。これらが近代的な「学校路線」ですね。

学校制度は明治五年に西欧にならってスタートしました。これはどういう意味をもったかという点、「近代化」ととって必須とみなされたすべてのことがらが、「政府」によって、国語、算数、理科、地理、歴史などの「教科」として編成され、当時のおよそ三千万の国民は一律に、この用意された「教科」の枠組みに合わせて生きることを余儀なくされることになったわけです。

しかし、その一方で忘れてはいけないのは、それ以前の江戸時代までの寺子屋や私塾や町中の講釈所などで育まれてきた、もうひとつの「民衆」の文化です。学校制度の導入によって、これらの民間の教育施設は前近代的なものとして捨て去られたわけですが、その文化までが失われたわけではない。

それを戦前に担っていたのは、どこよりも講談社だったと思う。「講談」という社名からしてそうですし、国民的雑誌であった『キング』や、私が子供のころに夢中になっ

て読んでいた『少年倶楽部』の存在は圧倒的でした。『キング』はどこか家に行っても必ずありましたし、『少年倶楽部』には血湧き肉躍る痛快な冒険ものがたくさん載っていて、学年誌なんて馬鹿らしくて読めませんでした。世界中を見渡してもああいう雑誌は稀有なものだったと思います。

つまり、講談社文化と呼べるものが戦前にはあったんです。そのことを自覚して、その伝統をどういうふうに生かしていくかを考えたい。だから私は、講談社は民衆の文化を背負うつもりで、新しい新書をつくれるのではないかと思ったわけです。

(中略)

——先生が思い描いていた、岩波新書とは違う「現代新書らしさ」とは、具体的にどういうものでしたか？

村井 岩波新書が読者に高校・大学以上のレベルを要求し、知的エリートを対象にしていたのに対して、中学卒でも十分わかるもの、しかし内容においては高度で深いものを目指しました。

岩波新書のまねをするのではなくて、それこそ戦前に『キング』や『少年倶楽部』を読んでいたような人たちが、「そうか、自分たちが日本の文化を背負っていけばいいんだな」と思ってくれたらいいなと。(後略)

ここで村井のいう「講談社文化」について補足しておきたい。講談社の創業者・野間清治は子どものころから講談に親しみ、講談を生んだ江戸町人社会の文化を栄養にして育った。特に曲亭馬琴きょくていばきん作の『南総里見八犬伝』を生涯愛読し、「自分の如きは仁、義、礼、智、忠、信、孝、悌の八つを、『八犬伝』によつて教え込まれ、これが自分の血の中にとけこんで、自分の云為行動うんいを律している」と言うほどだった。

第四代社長の省一はさすがにそのことをよくわかっている、ある座談会でこう語っている。

初代は、『八犬伝』の仁・義・孝などという言葉がたいへん好きでした。これは講談に流れている江戸時代の町人社会の精神ですね。よく、野間清治は「忠君愛国」がバツクポイントだった、という人がいるのですが、本人はそういう言葉はほとんど口にしていないんです。初代に一貫して流れていたものは、むしろ仁侠の精神、江戸の町人社会の精神だった。その精神が雑誌の中に盛り込まれ、多くの読者の心をつかんだのでしょう。

〔財界人思想全集7 財界人の教育観・学問観〕ダイヤモンド社より〕

新制中学卒でも十分わかる新書をつくつたらいい

戦前の講談社が人心をつかんだ理由はもうひとつある。中等教育機関（旧制の中学校・高等女学校・実業学校）の在学者数である。明治を通じて増えつづけ、日露戦前後に激増するが、それでも率で見れば、大正十四年（一九二五）の中等教育機関への進学者の比率は男子一九・八パーセント、女子一四・一パーセントだった。

つまり小学校のクラス四十人として、七〜八人しか中等教育機関へは進学できず、残り三十人以上がそのまま農業をしたり、奉公に出たりしていたことになる。家の貧しさのために立身出世コースから外れる少年たちはさぞかし悔しい思いをしたであろう。

そんなとき、野間清治が講談社刊行の雑誌として三番目に世に送り出した『少年倶楽部』で少年たちに語りかけた言葉は衝撃をもって受け止められた。

小学校を卒業しただけで、必ずしも中等学校に入らなくとも、偉くなることはできるものである。偉くなることの出来る人は、進んで中等学校に入っても入らなくても偉くなれるものである。入ると入らぬとはさほどの問題ではない。一体偉くなるのに一番必要なものは何であるか。それは学問ではない。才智ではない。その人の品性如何である。（略）古人は戒められた。偉くなるの道は遠くにあるのではない。極めて

手近にあるのである。仰いではたきをかけ、俯して雑巾をかける間にもある。飯を食べる、客を迎える、使いに行く、口上を述べる。お辞儀をする。その間にも偉くなる道は存する。(略) 諸君！ 一日一日が集って一月となり、一年となり一生となる。

「その一日」を偉くし給え。

「中等学校に行かなくとも偉くなれる」は、学歴社会から弾かれた青少年の生きる糧となる力強いメッセージであった。清治は、日常の修養の積み重ねが立身出世につながると思いき、「近代的な学校路線」と異なる道筋を示して圧倒的な支持を得た。

「江戸の町人社会の精神」から生まれた講談社は、つねに社会の下層をなす人びとに焦点を合わせながら成長をつづけてきた。村井はそうした歴史を踏まえ、岩波新書が「高校・大学以上のレベル」の「知的エリート」を対象とするなら、戦後の講談社は「新制中学卒でも十分わかる」新書をつくったらいではないかと言ったのである。

少年時代に清治の薫陶を受けた足澤は、その言葉に目を見開かされるような思いがしたのであろう。なぜなら、村井が提示した理念は、それまでの「講談社文化」のイメージを塗りかえるものだったからだ。前にもちよつと触れたように、戦前日本の文化構造は、大衆の低俗な講談社文化と、知識層の高踏的な岩波文化に分かれ、二つの文化の背反・隔絶が

日本のファシズムの温床になったとされてきた。

ところが、村井は教育学の立場から、この二項対立図式を否定した。彼はむしろ国家主導の「近代的な学校路線」が「富国強兵、殖産興業に奉仕する硬直したエリート」や「軍国主義的なエリート」を生み出したと考えた。一方で、庶民が学びたいことを学びたいと自由に学ぶ「寺子屋方式」こそ教育のあるべき姿で、そうした「もうひとつの『民衆文化』」を担ったのが講談社文化だと説いたのである。

3 現代新書が現代新書であるために

こんなもの、できっこない——冷ややかな社内の空気

学習図書第一出版部は、部員の大半が二十代、しかも学年誌などの編集に携わっていた者ばかりで、単行本の経験があまりなかった。だから、山本康雄はこう言う。

何しろ本づくりがわからない。「チリ」（中身を保護するため表紙が本文より一回り大きくはみ出した部分のこと）と言ったってどういふことなのか、「スピン」（しおり紐）とか「見返

し」(表紙と本の中身を接着するために用いられる紙)とか言ったってわからない。本を買ってきて、ああこれがチリで、これがスピンだなど覚えながらやった。(「七十年史資料」)

それでも、部員たちは岩波新書の新刊が出るとすぐ私費で買いこみ、新たな新書の企画立案に取り組んだ。基本のコンセプトは「最高度の内容をよりわかりやすく、小学生、中学生にもわかるように書いてもらう。初発の疑問に答える新書」(山本)である。

執筆陣の候補者リストもできあがった。名前が挙がったのは、湯川秀樹・桑原武夫・貝塚茂樹・吉川幸次郎・今西錦司・田中美知太郎など、いわゆる「京都学派」の重鎮に、東大教授の中根千枝、一橋大の都留重人、奈良女子大の岡潔ら。いずれも時代のオピニオンリーダーとして脚光を浴びる人たちである。

企画会議にこのリストを出すと、営業サイドから「ペーパープランとしてはいいけれど、これはいったいどうして書かせるのか。誰がそれをやるのか」という声があがった。第一線で活躍している学者が講談社で書いてくれるはずがない、というのである。

山本は、若い部員たちが並ぶ前で「誰がそれをやるのか」と言われ、「大変失礼なことを言う。その部署で提案している人がやるのに決まっているんで、誰がやるのかなんてひどい言い方はないじゃないか」と憤慨した。

こんなものは講談社ではできっこないと、案を検討すらしてくれないんです。足澤さんはその前に営業にいた人でしたが、そういうときには一切口をきいてくれないんです（笑）。陰では私たちに「やれ、やれ！」というんですが。

（山本の証言）

（社内の反応は）もちろん全部が反対ですよ。そんなこと講談社にはできるわけがないということが頭にありますから。誰がどんなふうに言ったか、今でも覚えていますよ（笑）。足澤さんは（前に）販売的な立場にもいたでしょ。とにかく「販売部が反対するものをやろう」というのが足澤さんの意見だった（笑）。

（朝倉の証言）

営業サイドや重役たちの反対で、シリーズを立ち上げる企画はなんども差し戻された。それでも粘って「リストの候補者が全員、執筆を引き受けてくれるなら」という販売部長の言質をとりつけた。それを受け、部員たちは著者との交渉に入る。

とにかく四回、絶対行け

刊行の趣旨を社用箋に二十枚ほど書いて送り、面会の約束を取りつけて会いに行くのだ

が、学者の中にはあからさまに「なんだ、講談社は大衆出版社じゃないか」とバカにする人がいた。「なんで講談社に私が書かなくてはいけないんだ」と怒り出す人もいた。多くの学者が「岩波には恩があるが、講談社にはない」と言った。

足澤はみずから京都に赴き、「京都学派」の重鎮たちを訪ねてまわった。最初に会った京大人文科学研究所所長の桑原武夫（フランス文学）は「オレは書くとも書かないとも言わない。講談社には縁もゆかりもないからね」とそっけなかった。

足澤が辞そうとすると、気の毒に思ったのか、桑原は「次は誰に会うんだ」と訊いた。「貝塚茂樹さん（中国史学。湯川秀樹の兄）に会いたい」と答えると、「それじゃ、貝塚のところへ僕が電話しておいてやる」と言った。

この桑原の電話が効いたらしい。貝塚は初対面の足澤に、「桑原さんは何を書くと言ったんですか」と訊いた。

「書くとも書かないとも言わないというお話でした。でも（貝塚）先生には『論語』でも書いてもらったらいいんじゃないかと言っていました」

足澤が答えると、貝塚は、

「そう言っていましたか。じゃ、僕は『論語』を引き受けよう」と言った。

貝塚のOKがとれたのはビッグニュースだった。山本は東京の本社で編集会議の最中に足澤の電話を受け、部員たちとともに歓声をあげたという。

貝塚は足澤に「僕だけじゃしょうがないから、松田道雄さん（小児科医・評論家）のところに行ったら？」と勧めてくれた。松田は超多忙だったが、足澤が行くと、「とても書く時間がないから勘弁してくれ。ただし暇になったら何か考えましょう」と言った。その約束は、ほどなく現代新書『日本式育児法』となって果たされた。

足澤はこの京都訪問で湯川秀樹（物理学）や加藤秀俊、鶴見俊輔（哲学）、多田道太郎（フランス文学）らとも会っている。「七十年史資料」の足澤証言。

それで、いっぺんだけ会っても、だいたいダメに決まっている。だから、まず行って、断られたら、そこで諦めるんじゃないに、しばらくおいてまた行こう。とにかく四回まではみんな行く。そうなればたいがい書いてくれるにちがいないという局としての一つの方針を立てた。とにかく四回、絶対行け、と。

山本や部員らの頑張りで、リストの著者の一人を除く全員が執筆を承諾した。

初発的かつ根本的に

東京五輪直前の昭和三十九年（一九六四）三月、学習図書第一出版部から「現代新書」が誕生した。初代編集長は山本康雄（のち常務）。編集部はシリーズの名前として「講談社新書」を希望したのだが、他局に反対された。当時編集部員だった渋谷裕久（のち現代新書第五代編集長、監査役）は言う。

社内では、「まだどうなるかよくわからないシリーズに、会社を代表するかのような名前をつけるなんて……」という雰囲気があった。それで、「現代」を足したんです。ネーミングのことで社内で喧嘩をしてつぶされるよりはマシだ、とそこは妥協したわけですね。

（「現代新書五十周年特別企画」インタビュー）

村井実が起草した「刊行のことば」は「教養は万人が身をもって養い創造すべきものであつて、一部の専門家の占有物として、ただ一方的に人々の手もとに配布され伝達されるものではありません」という言葉から始まる。これは、岩波茂雄が「文化の配達人」を自任していたことを踏まえたもので、「不幸にしてわが国の現状では、教養の重要な養いとなるべき書物は、ほとんど講壇からの天下りや単なる解説に終始し」ているとつづく。

そうして「このことは、中・高校だけで教育をおわる人々の成長をはばんでいるだけでなく、大学に進んだり、インテリと目されたりする人々の精神力の健康さえもむしばんでいる」とし、「講壇からの天下りでもなく、単なる解説書でもない、もっぱら万人の魂に生ずる初発的かつ根本的な問題をとらえ、掘り起こ」したいと述べている。

ポイントは「初発的かつ根本的」という言葉だろう。つまり「新制中学卒でも十分わかる」新書を目指す。それが、足澤や山本らの狙いでもあった。部員だった渋谷がさらに語る。

（当時の岩波新書には）僕ら編集者でも最後まで読み通せない本が少なからずあったんです。それぐらいその頃の岩波新書は学術色が強くて、硬かった。

そこで僕らは、原稿にどんどん注文をつけようと決めました。一般の人が最後まで読み切れない本では意味がない。原稿をもらって終わりではなく、わかりにくいところは徹底的に書き直してもらおう、と。

たとえば、漢文が原稿に出てきたら、書き下し文にしてくれませんか、とか、そういう基本的なことからすべて読者の目を見て、とにかく読みやすくしようと注意を払いました。「こんなのもわからないのか！」と怒り出す先生もいたけど、こういうことをきちんやりとものすごく喜ぶ先生もいましたね。

（同右）

シリーズ第一弾は、都留重人の『経済学はむずかしくない』、池田弥三郎（慶大教授。国文学）の『光源氏の一生』、南博の『現代を生きる心理学』の三冊だった。『経済学……』は初版五万部、『光源氏……』は四万部からスタートして順調に版を重ねた。

第二弾は村井実の『人間の権利』、岡潔『風蘭』、渡辺一夫（東大名誉教授。フランス文学）の『私のヒューマニズム』。翌月の第三弾は湯川秀樹・片山泰久・山田英二共著の『物理の世界』、平井信義（お茶の水女子大教授。児童心理学）の『性を考える』、正木ひろしの『弁護士』と月三冊のペースで送り出した。順風満帆の船出だった。

理念と現実とのギャップ——進学率の上昇

昭和四十二年（一九六七）は、戦後日本が本格的な大量生産・大量消費の時代に突入した年だった。テレビの受信台数は二千万を超え、自動車の総保有台数も一千万を突破した。出版界では『週刊少年マガジン』が少年週刊誌で初めて百万部を超え、現代新書最初の大ベストセラーである中根千枝『タテ社会の人間関係』も誕生した。

この年の春、講談社に入った田代忠之（のち第六代編集長、専務）は三カ月の研修を経て学芸図書第一出版部に配属された。すなわち現代新書編集部である。すでに学習編集局から

学芸局に機構は改編され、編集長は初代の山本から梶かじ包喜かねよしに替わり、学習編集局長の足澤は取締役書籍営業局長に昇格していた。以下は「百年史資料ヒアリング」に残された田代の証言である。

創刊のころの現代新書は、池田弥三郎・南博・都留重人・岡潔・湯川秀樹などといった錚々たる大物中の大物の著者をそろえていました。テーマもいわゆる基礎の教養というのでしょうか、非常に強力なラインナップでスタートしたもので、創刊時は大変な実績があがったと思います。（それが）創刊から三年たったころ、すでに創刊後の第一低迷期というか、そういう時期にさしかかっていた。営業的にも楽ではなかったと思います。

「第一低迷期」とはただごとではない。なにがあつたのか。田代の入社二カ月前に刊行された『タテ社会の人間関係』は増刷に増刷を重ね、ついには百十五万部を超える大ヒットとなるのだが、それだけでは回復不能なほど現代新書全体の業績の落ちこみがひどかったということだろうか。詳しいデータがないので真相はわからない。ただ、後述するように、当時は「原稿がかなり苦しく」なって「もらっては入れ、もらっては入れやっていた」と

渋谷裕久が証言しており、田代も次のように語っている。

私が配属になったところは原稿が入らなくて（二十日の発売日が）かなりずれていました。ひどいときは翌月頭にくることがあった。進行が悪かったから、原稿が入ると右から左なんです。なかにはクオリティ・コントロール（品質管理）をなくしちゃうのもあるわけです。このころ私が先輩から引き継いで担当したのがありますが、著者をどこかに缶詰めにして、上がった原稿を部長がチェックもしないで、そのまま印刷所に入れさせられました。そんな状況だから、それがやっぱり営業的にもかなり響いたところはあります。

低迷の原因は、現代新書の基本理念にもあったろう。どういう読者層を対象にどんな本を作るのかというもつとも肝心なところである。創刊時にはそれが「中学卒でも十分わかる」「初発の疑問に答える新書」とされていたのを思い出してほしい。

そのうえで戦後の大学進学率を知っていただきたい。昭和三十年（一九五五）に一〇・五パーセント、つまり十人に一人の割合だったのが、現代新書がスタートした昭和三十九年（一九六四）には一九・九パーセントに倍増した。これが昭和四十五年（一九七〇）だと二三・

六パーセントになり、十年後の昭和五十五年（一九八〇）には三七・四パーセント、つまり五人に二人の割合になった。

次は高校進学率である。昭和二十五年（一九五〇）に四二・五パーセントだったのが、昭和四十年（一九六五）には早くも七〇・七パーセントとなり、昭和四十九年（一九七四）には九〇・八パーセント、つまり十人に九人が高校に進学することになった。

戦後の教育拡大と高学歴化で、読者層として想定した「中学卒」が消え、「中・高校だけで教育をおわる人々」（「刊行のことば」）も急激に減りつつあったのである。こうした基本理念と現実とのギャップがマイナスの影響をもたらさないはずがない。

どれをとつてもかなわない

現代新書の低迷ぶりと同時に、新入社員だった田代の記憶に残っているのは、ライバルの岩波新書の圧倒的な強さである。田代は「百年史資料ヒアリング」でいくつかの数字を挙げながら、その強さの秘密を解説している。

まず第一に価格である。田代の入社当時、岩波新書の定価は一律百五十円で、中公新書は百八十円前後。それに対し現代新書は二百三十円〜二百五十円だった。現代新書はページ数によって業務部が原価を計算してつけたので定価は一定ではなかったが、岩波新書と

比べて百円近い開きがあつた。

第二点は初版部数である。岩波新書は非常に強い著者群を抱えて、売れ行きもよく、初版部数が約五万部だつた。しかも完全買い切り制だつたので、書店からの返品を心配する必要がなかつた。「何と言つても、まだ『岩波神話』が生きていましたから、「書目を見ずに（毎月の）新刊三冊を予約で買つちやう」という読者がだいたいいた」（田代）という。

一方、現代新書や中公新書はフリー入帖（書店からの返品をいつでも受け入れる制度）で、中公新書の初版部数は二万〜三万部。現代新書は標準で一万二千部。それも、ちよつと弱いテーマだと一万部を割り、八千部ということもあつた。

第三は、著者に支払う印税の率である。岩波は一三〜一五パーセント。中公新書もだいたい一二〜一三パーセント。現代新書は例外はあつたが一〇パーセントというごく普通の印税率だつた。そのため「著者にとっては初版部数が多いし、印税率も高いので、どうせ書くなら岩波、中公にということでしたね。ですからシリーズに有力な売れっ子の著者を引つ張り込むのは、現代新書はすぐ難しいところがありました」（同）。

つまり当時の現代新書は価格・初版部数・印税率のどれをとつても岩波新書に大きく後れをとり、中公新書にもかなわなかつた。

池田大作に本を頼むくらいの勇氣はないのかね

昭和四十三年（一九六八）二月、現代新書の編集長が梶包喜から朝倉光男に替わった。それからしばらくして、営業担当役員の山口勘三やまぐちかんざぶろ（のち副社長）の主宰で、臨時の会議が開かれた。最悪の場合は現代新書の休刊も視野に入れた重大な会議だったが、いろんな意見が出て、結局、休刊という結論には至らず、「テコ入れ、立て直しを」ということになった。田代の証言。

そのとき私は新入社員として出席していて非常にショックを受けたのは、今でもはっきり覚えていますが、山口勘三さんが朝倉さんを攻撃するわけです。「なんとかならないのか」と。そのセリフの中に「朝倉君、きみは現代新書を立て直すために、例えば（創価学会会長の）池田大作に本を頼むくらいの勇氣はないのかね」と言ったんですよ。それを聞いてね、私はちよつと啞然としましたね。もちろん朝倉さんはそんなことをしませんでしたよ。そういう発言が出るほどの会議の空気ではありません。

出版社が巨大教団の購買力をあてにするようになったらおしまいである。現代新書は大きな壁に突き当たっていた。

そして昭和四十六年（一九七二）八月、加藤勝久が朝倉に替わって学芸図書第一出版部長となる。課せられた任務は言うまでもない。どん底に陥った現代新書の立て直しである。

基本理念の否定

以下は「七十年史資料」に記録された加藤と、部下であつた渋谷裕久のやりとりである。

加藤（自分が部長になつた）そのときは本当に（現代新書が）底をついていてさ。

渋谷 だいたい部数が少なくなつたのは（刊行順の番号が）四十番台で、けっこうもう数千というのがあつたんだよ。すでに五、六千とか七、八千になっちゃつて。

加藤（二代目部長の）梶さんがやっていたときに、やや趣味的なものがあつたね。

渋谷 それで（昭和）四十一、二年ごろになつてから、原稿がかなり苦しくなりましたね。もらつては入れ、もらつては入れやっていたところがある。そうなるとやつぱり……。

加藤 余裕がないわけね。ダメなものでもやつちやうみたいのがあるんだよ。申し訳ないけれども、だけど、それは、今はもうなくなつちやつていると思うんだね。

（あるとき、部員の）上田好春君が（原稿を読んで）「これはもうダメだ。（筆者に）返そう

よ」なんて、すぐ目の前で電話をかけ出した。まさかそこでかけるとは思わなかった。「先生、今度の編集長（加藤のこと）は厳しい人で、ダメだそうです」なんて言っている。（僕は）「よしてくれ」と言った。（笑）あれはおかしな男だね。（中略）

渋谷君は、最初の創刊のときにいたんだっけか。

渋谷 創刊から三年ちよつといて。

加藤 そうだね、あのときは、何でも「ます調」で書けばいいという感じで。

渋谷 というのは、さっきも言ったように、（現代新書の編集部はもともと小学生向けの学別学習誌を出していた）学習局だったでしょう。それがそもそも基点にあるわけなんです。

加藤 それともう一つは、（以前から講談社が出していた）「ミリオン・ブックス」を気にして、こちらはもうちよつと「初発的」という妙な言葉がそこへ出て来たわけです。だから、中学生でもわかるということをやった。ところが、実際そんなことを言ったって無理なわけですね。だから、著者自身を書きにくかったと思う。いろんな注文をつけられて、縛られちゃって、これはもつとやさしい表現にしろというようなことで、無理してやさしくしたりした。そうすると、内容まで規制されちゃうような形で、その点ちよつとひよわなところが最初あったね。

このやりとりを読むと、加藤が初期の現代新書の編集方針をどう見ていたのかよくわかる。彼は「中学卒でも十分わかる」新書という基本理念そのものを疑問視、もつと言えば否定し、「実際そんなことを言ったって無理なわけですね」と言いきっている。あるいは、そこまでさかのぼって考えなおさなければならぬほど、事態は深刻だったということかもしれない。

ちなみに加藤が言及した「ミリオン・ブックス」は、昭和三十〜四十二年、講談社が刊行した新書判シリーズのことだ。発売当初は石川達三『いしかわたつぞう悪の愉しさ』、中野重治『なかのしげはるむらぎも』など文学作品の二次出版物が中心だったが、その後はノンフィクションや教養新書的な書き下ろしも混ざり、シリーズの性格づけがあいまいだった。その「ミリオン・ブックス」とのちがいを読者に説明するため、現代新書は「刊行のことば」に「初発的」という妙な言葉（加藤）を入れざるをえなかったという事情もあったらしい。

杉浦康平を起用！

編集長に就任早々、加藤が打ち出したのは、「初心者向けの新書」という従来のイメージを一新し、「高校生・大学生からサラリーマンまで幅広い層が読む教養新書」に変えること

だった。田代によれば、その手始めに「装丁をなんとかしようよ」と加藤は言った。

それまでの現代新書には塩化ビニルのカバーがかかっていた。装丁はえんじ色のアーチのなかに書名と著者名を記した、カットもなにもないシンプルなものだった。塩化ビニルのカバーは静電気を起こすので、本屋の棚でホコリがついた。とくに背表紙が黄色く変色したうえホコリがつき、タイトルが見えづらく、汚かった。田代の証言。

『タテ社会の人間関係』で（四年前に）ヒットは出したけれど、低迷期で売れなくなってきた。本屋で置いてある場所が奥のほうの目立たないところで、悪いところなんです。美観も損ねるということで、加藤さんが「やっぱり、本は内容というけれど、装丁を変えないとどうしようもないだろう」と。それで変えることになったんです。

そこで白羽の矢を立てたのが、のちにグラフィックデザイン界の第一人者となる杉浦康平^{へい}である。杉浦は当時まだ三十代後半だった。加藤は渋谷の杉浦事務所を訪ね、現代新書の装丁一新を依頼した。そのときのことを杉浦自身が「現代新書創刊二十周年記念」インタビューで語っている。

当時は講談社のほか岩波、中公、クセジュ、三一、紀伊国屋、筑摩のグリーンベルトなどいろいろな新書がありました。そういう中で、従来の教養主義的色彩から少し脱却して、高校生以上の比較的ダイナミックな、強い好奇心を持った人たちに働きかける新書に変えていきたいので、そのための装幀を考えてほしいと、現代新書の編集長がいつてこられたように記憶しています。

杉浦は加藤の言葉を聞いて、「既成の二大新書」に挑戦し、「(現代新書を)若い世代の人たちにもっとオープンにしたい。新書のイメージをもう一歩前進させたい」という強い意志を感じたという。

同年秋にできあがった装丁は、以後三十三年間、現代新書の顔になる。クリーム色の地に、やわらかい感じの天明朝体、八〇級という大きな文字でタイトルが縦書きにレイアウトされた。内容紹介のネーム(簡単な説明文)が表に入り、カラーのイラストが表紙と背に配された。書店の平台に初めて並べられたとき、「まるでアゲハ蝶が舞うようだ」と評されたように、華麗にして斬新、他に類を見ないデザインだった(『物語 講談社の100年』より)。

それだけではない。本ごとにタイトルの書体や大きさを変えたり、カバーの裏に年表や

図を印刷したり、袖（カバーをかけるときに表紙の内側に折り込む部分）で関連本を紹介したり、裏に著者の写真を入れたり。現在ではあたりまえのことになっているが、すべて杉浦の発明だった。端的にいうと、杉浦は「カバー＝中身を保護する」という既成概念を破り、「カバー＝本の内容を表現する」という新たな概念を打ち立てたのである。

新装丁の第一号は、田代が担当した京大助教・樋口隆康（考古学）の『日本人はどこから来たか』だった。これがベストセラーとなり、三ヶ月で十萬部を超えた。

すべてが変わった

加藤は新刊だけでなく、既刊本もすべて新装丁に変えさせた。部員たちは自分に割り振られた既刊本のネームを書きながら、杉浦とともにそれぞれの本のデザインを決める作業に追われた。

入社四年目で加藤部長の下に配属された鷲尾賢也（わしお けんや）の（のち現代新書第七代編集長、取締役）の回想。

印象深いのは、私がネームというカバーの文章を書くときに、前の晩に（原案を）書いて、部長の机の上に置いて帰るんですけど、翌朝、それを加藤さんが、あの人朝

早いから、手入れをしてくれるんですよ。その手入れがまことにみごとで、なるほど文章とはこういうふうに書くものかと思いました。

次も田代の証言。

一度に全部変えるというのは大変だったんですが、その成果がありまして、販売的にも上向きになりました。当時いわゆる『教養新書』は『岩波新書』『中公新書』『現代新書』しかありませんから、大変目立つし、何よりもきれいなということで、今まで奥の目立たないところに置かれていたものが、現金なことに、入ってすぐの目立つところにバーツと置かれた。しかも新刊だけじゃなく既刊本も。棚差しだけじゃなくて、面陳というんですか、表紙を見せて陳列してもらえるようになって営業的にも上向きになりました。

杉浦の革命的な装丁は、編集部員の意識にも変化をもたらした。部員たちは杉浦事務所に日参しなければならなくなった。多いときは日に二度だ。杉浦が次々と新たな注文やアイデアを出したからである。部員だった菅野匡夫が言う。

僕らは杉浦事務所に行くのが怖かった。杉浦さんは単なるデザイナーではなく、実質編集長みたいなところがありましたからね。彼はつねに書店の店頭に行って、自分の装丁がうまくいっているかどうかを見ていた。売れていなければなぜなのかと考える。そうして企画の内容にまで踏み込んで僕らに質問する。場合によっては原稿の欠陥を指摘することもあった。そうして、そういう内容だったらこういう絵が必要だ、こういう資料はないかと注文してくるから、それに応えるため必死で探し回らなければならぬ。大変だったけど、現代新書の質を向上させるのに杉浦さんの存在はとても大きかった。

杉浦は印刷会社に対しても厳しかった。カバーに入る〇・一ミリほどの細い野線を、二色で掛け合わせて色をつける指定をする。凸版印刷（現TOPPAN）からは「冗談じゃない、野線の掛け合わせなんてできません」と苦情がくる。しかし杉浦は「冗談じゃないって何ですか」と反論した。「その細い野線がぴったり合っていないことは、大もとのトンボ（位置決め印）が合っていないということだ。だとすれば、他の大きな文字や写真・イラスト、すべてが正確に製版されていないということじゃないか！」と反論した。

これには凸版印刷もグーの音も出ない。そういうやりとりをなんどもくり返すうち職人も意気に感じ、「やりましよう」と応じるようになった。その後、凸版印刷では現代新書の製版責任者が一人ずつと専任でつくようになったという。

再録とブランチ

田代によれば、現代新書の売れ行きが上向きになったのは、装丁一新のほか理由が二つある。そのひとつが単行本の再録である。それまでの新書は書き下ろしが原則だったのだが、加藤は「必ずしも書き下ろしにこだわらないで、単行本でベストセラーになったものをそのまま入れたらどうか」と言った。

そこで二年前に単行本でヒットした京大教授・会田雄次（西洋史）の『日本人の意識構造』を新書で復活させると売れた。梅原猛・岡部伊都子の『仏像に想う』（上・下）もすでに京都の淡交社から出ていたのを装丁を変えて現代新書に入れたら、ヒットした。

こうした再録には部内で「教養新書は文庫とは違うのだから、再録はよくないのでは」と反対の声があつた。加藤はそれに対し「テコ入れ策として大物の著者をなるべく早く起用したい。書き下ろしだとどうしても二年先、三年先になるので、とりあえずのカンフル剤としてやってみよう」と説得に努めたという。

三番目のポイントは、現代新書にブランチをつくったことだ。加藤は「日本の古典」(全五冊)、「新書 西洋史」(全八冊、以下同じ)、「新書 東洋史」「新書 日本史」と「シリーズ内シリーズ」を次々に刊行した。これは新書ではあまり例のない画期的な試みで、これにより単体では売れ行きが望めない骨太のテーマも版を重ねるロングセラーとなった。

たとえば「新書 西洋史」では第一巻『文明のあけぼの』(二十三刷)、第二巻『地中海世界』(三十六刷)、第三巻『封建制社会』(二十六刷)、第四巻『ルネサンス』(三十五刷)などと、すべての作品が二十刷を超えるロングセラーとなった。

こうした歴史シリーズに京大系の学者を起用したのも加藤だった。若手部員だった守屋龍一りゅういちが語る。

そのころ岩波新書には東大系の学者が書くことが多いと言われていたんですが、加藤さんが岩波新書に対抗して「俺は京都にシフトする。京都の学者を総動員するつもりだから、その方策を考えろ」と言ったので、部員たちは一斉に京都に通いだしたんです。当時、京都には梅棹忠夫うめさねただおさんや林屋辰三はやしやたつさぶろう郎さん、それに会田雄次さんなどたくさんいましたからね。京大系の学者も東大への対抗心が強かったから、加藤さんの呼びかけに呼応して、「新書 西洋史」とか「新書 東洋史」とか、東大閥の歴史観では

ない京大閥の歴史観に基づく新書を作ったんです。

加藤の現代新書は売れ行き良好の企画を次々と生んだ。前に触れた『日本人の意識構造』がベストセラーになったすぐ後、清水幾太郎（社会学）の『本はどう読むか』が注目を集め、数カ月後に板坂元（日本文学）の『考える技術・書く技術』がベストセラーになった。

絶頂と驕り

昭和五十一年（一九七六）に渡部昇一（英語学・哲学）の『知的生活の方法』が登場し、それまで売れ行きトップだった『タテ社会の人間関係』を上回るメガヒットとなった。『知的生活の方法』と同時期に出版された林竹二の『田中正造の生涯』は毎日出版文化賞を受賞、名実ともに現代新書の存在感を高めていった。田代の証言。

（このころ現代新書は）おそらくその後も超えられていないと思うんですが、販売、利益面でも最高の実績を残したと思います。純利益一億円超、売り上げが最高で十二億円くらいでした。このときは岩波新書は超えてはいないけれど、かなりのところまで追いついていますし、中公新書はかなり凌駕しました。当時は両新書ともヒットがなく、

低迷期で、岩波新書はそれまでの財産で何とかそれなりのレベルを保っていましたけど、中公新書は現代新書にかなり水を開けられたはずですよ。すごいんですよ。重版の（売り上げの）比率が七五パーセントですよ。私は今でも覚えていますが、売り上げの四分の三を重版で食えたらこんな楽なことはない。そういうわけで、加藤さんが部長で来て、現代新書のテコ入れをして軌道に乗り、創刊時に次ぐ（第二の）黄金期を迎えることができたわけです。

このころ加藤は四十年代後半から五十代にかけての男盛りである。ロマンスグレーの髪をオールバックになでつけ、冬でも下着なしのワイシャツ一枚、ループタイのダンディな格好で颯爽と歩く姿を多くの社員が記憶している。

加藤は昭和四十九年（一九七四）、取締役学芸局長に昇格、同五十三年（一九七八）に常務、同六十年（一九八五）には専務と昇進を重ね、編集部門を統括する立場になる。

その間に現代新書の部下だった菅野匡夫とタッグを組み、『昭和萬葉集』（全二十巻＋別巻一、昭和五十四～五十五年刊）を刊行した。『昭和萬葉集』は昭和元年から半世紀の間につくられた短歌約一千万首のなかから五万首を選んで収録したもので、激動の時代を生きた庶民の生活感情を集大成したのとして菊池寛賞を受賞した。

が、そのころから加藤を取り巻く環境が変わっていく。昭和五十六年（一九八二）、現代新書の『生みの親』というべき足澤禎吉が解離性大動脈瘤のため六十歳で急死した。昭和五十九年（一九八四）には、加藤の最大の理解者だった野間省一が長い闘病の末に死去。さらにその三年後の昭和六十二年（一九八七）には、省一の娘婿で、第五代社長の野間惟道これみちが急性硬膜下血腫のため四十九歳の若さで他界した。

加藤は惟道とは『飲み仲間』として心の通い合うところがあつたらしい。翌年刊行された『追悼野間惟道』にこんな和歌を寄せている。

戯れに「三頭の牛」といひしことあり、社長・会長・小生と、ともに一回り違いの丑年なりしかば。

三頭の牛の若きが駈け行きて いづち往いにしか 影もあらなくに

「会長」とは当時の講談社会長・服部敏幸はつとりとしゆき（大正二年の丑年生まれ。野間清治の妻・左衛さえの姪にあたる）のことだ。加藤は大正十四年の丑年生まれ。そして、いちばん若い「社長」の惟道が昭和十二年の丑年生まれ。「三頭の牛のうち、いちばん若い牛が駈け去つてゆく。いったいどこへ行ってしまったのだろうか。もうその姿も見えなくなつてしまったのだなあ」と解すると、加藤の胸中が浮かび上がる。

もはや潮時——『DAYS JAPAN』の誤報騒動

平成元年（一九八九）十月、加藤の後半生を決定づける事件が起きる。新時代の講談社の顔として創刊されたばかりの雑誌『DAYS JAPAN』の誤報騒動である。

問題になったのは、平成元年十一月号の「講演天国ニッポンの大金持ち文化人30人」という特集記事だった。そのなかで「子育てアグネス200万円」という見出しでタレントのアグネス・チャンの講演料を二百万円だと報じたのである。

アグネス側が「事実誤認だ」と抗議すると、『DAYS JAPAN』は同年十二月号に見開き二ページという異例のスペースを割いて「アグネス・チャンさんにお詫びいたします」という編集長名の文章を掲載した。

それによると、編集部は取材段階でアグネス事務所から「約2時間の講演で、都内であれば80万円、地方で1日拘束になる場合は100万円」という回答を受けていたが、「業界通といわれる人たちの誤った情報から、誤った金額を記載」してしまったという。

お詫び文の要点は『DAYS JAPAN』の同じ号の新聞広告にも掲載された。こうした対応に社の内外から「講演料が過大だったというだけで、ここまで謝る必要があるのか」と批判の声があり、講談社は同年十一月、『DAYS JAPAN』の休刊を決定。専務の

加藤が引責辞任するに至る（編集長はその後、退社。担当役員は顧問になった）。

事件の経過には不可解な点があった。まず、休刊・引責辞任の理由はなんだったのか。誤報をしたためか、それともお詫びのしかたが悪かったのか。

社長の野間佐和子（省一の娘で、惟道の妻）は平成二年（一九九〇）一月の年頭所感で「私が休刊を決意したのは、何よりも、お詫びするうえでの編集部の主体性やプライドが見当たらなかったからです」と語っている。

ということとは、問題は誤報よりも、アグネス側の言い分をそのまま受け入れたお詫び文にあったことになるのだが、その交渉に加藤がどうかかわったのかはつきりしない。そもそも過剰なお詫びが、休刊や引責辞任に値するできごとなのかという疑問も残る。

加藤は辞任の経緯について周囲になにも語らず、社員たちも首を傾げるばかりだった。佐和子社長との見解の相違が背景にあるとの説もあったが、真相は定かではない。

ただ、思うに加藤は省一・惟道をつづけて失って以来、自分の講談社人生もそろそろ潮時だと考えるようになっていたのではないだろうか。「三頭の牛の若きが駄げ行きて……」という寂寥感の漂う切ない歌がそれを暗示しているような気がする。

加藤は六十五歳で講談社を退職後、東京近郊の自宅や長野県・塩尻の別荘で好きな本を読んで暮らした。七十五歳を過ぎたあたりから、「自分はもうボケて、気の利いた話もでき

なくなつたから」と言つて講談社の後輩たちとのつきあいを断つた。静かな余生だつたらしい。亡くなつたのは平成三十一年（二〇一九）二月十五日、九十三歳だつた。

ふたりの加藤

令和五年（二〇二三）年九月二十日、社会学者の加藤秀俊が亡くなつた。享年九十三。奇しくも加藤勝久とおなじ歳である。ふたりの加藤に共通するのは、新書という器についての明確な意識と、戦後社会の動向に対する状況認識の鋭さだつたと思う。

加藤秀俊は、先にふれた「日本の新書文化」のなかで、日本の新書は欧米の軽装版と違い「ほとんどが書きおろしで、それじたい独立の領域」をもち「世界でも珍しい機能を背負っている」と述べている。その機能とは「うごきつつある「現代」への俊敏な姿勢」であり、「現代に生きるための知識と技術を提供することなのだ」という。

そのとおりだと思う。岩波新書は日中戦争の最中に「中国に対する日本の軍事行動を反省し批判する資料を提供」するために生まれた。戦後生まれの中公新書も現代新書も「現代に生きるための知識と技術を提供」しようとしてきた。その意味で、新書とは、加藤が言うように「判型のスタイルというよりは、ひとつの思想のスタイル」であり、「現在」と切りむすぶ出版形式」なのである。

さらに、すでにふれたように加藤は、教育拡大による戦後社会の変化も正確に見通していた。新学制がひかれたおかげで「新制高校卒業生も掃いて捨てるほどたくさんいる。大学を出たといっても昔ほど幅は利かない」（「中間文化論」）として、高校・大学進学率の急増を視野に入れながら中公新書の方向性を定めた。卓見というべきだろう。

一方、現代新書の創刊メンバーたちは読者層として「中学卒」に照準を合わせたが、これは当時の現実との間に明らかな齟齬があった。創業以来、社会の下層に焦点を合わせながら成長してきた講談社のDNAがしからしめた「判断ミス」と言うべきだろうか。

しかし、加藤勝久はこの創刊路線を受け継ぎつつも大胆に否定、いわば止揚することによって現代新書を再生させた。「中学卒でも十分わかる」新書なんて「実際そんなことを言っただって無理なわけですね」と断じたことで、現代新書はいまにつづいている。

精神のリレー

平成八年（一九九六）、日本国内の出版物の売上総額はピークの約二兆六千億円に達した。それから売り上げは下がりつづけ、令和四年（二〇二二）には一兆六千三百五億円の約四割減となった。苦境の出版業界は、単行本よりも単価が安く、比較的編集経費もかからない新書に活路を見出そうとする。平成六年（一九九四）のちくま新書の創刊はピーク前のこ

とだが、それを皮切りにP H P新書、文春新書、平凡社新書、光文社新書、集英社新書ほか数々の創刊が相次ぎ、いわゆる“新書戦争”が始まった。

現代新書は苦戦を強いられた。一九九〇年代後半から二〇〇〇年代初頭にかけて赤字に転落した。が、電子書籍の売り上げが急増した二〇一七年ごろから復調に転じたという。

活路はやはり電子書籍などのデジタル方面にあるらしい。現代新書の第十五代編集長・川治豊成は『中央公論』の新書編集長座談会で次のように語っている（二〇二四年三月号）。

……団塊の世代があと5年ほどで全員80代になります。お元氣な世代ですが、それでも日常の中で新書を読む習慣を持っている世代が少しずつ市場から退場していくことは間違いない。5年後の新書市場はパイがガクンと小さくなっているもおおかしくありません。そういうプロセスの渦中にいると捉えています。

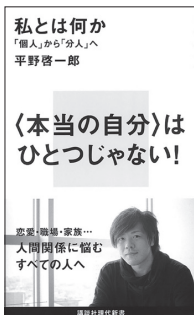
当然、デジタル化も影響しています。若い世代をターゲットにしている女性誌の世界の変化はもっと早く訪れました。スマホからタダで情報を得るようになった。かわいもの、すてきなものもネットで見られる。女性誌の苦境は15年以上前に始まっています。この波は順次襲ってきていて、新書や新聞・週刊誌は最後で、その最後がいよいよ来つつある。（略）

……つまり、これまで以上に本の存在を知らせる努力をしない限り、どんなに苦勞して作ってもその本は世の中に存在しないのと同じなんです。だから、どうやって知ってもらうか、知恵を絞るしかない。デジタルを使うしかないと思って、編集部では試行錯誤しています。

新書は時代とともに変わっていく。いや、「現在」と切りむすびながら変わっていくからこそ新書なのである。本稿に登場した編集者たちは先達から受け継いだ「思想のスタイル」に自分なりの工夫を加えつつ次代に手渡してきた。その精神のリレーはこれからも途絶えることがないだろう。黒柳徹子が言ったように「本の寿命というのは、人間の寿命なんかより、ずっと長」く、どこまでもつづくのだから。

第2部

全国の書店員がすすめる
「現代新書、この60冊」



平野啓一郎

「個人」から「分人」へ
私とは何か

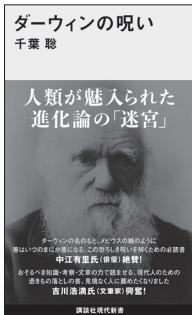
人間には一人ひとりに核となる個性、本当の自分というものがあり、私たちは社会的な生活を営み対人関係を維持するために、多かれ少なかれそれを隠し、嘘をつきながら生きている……あたり前のように思えるこの前提が実は誤りであり、そのことでさまざまな悩みや苦しみが生み出されているという説はとて腑に落ちる。

SNSで複数のアカウントを使い分ける時代になっても、根強く「唯一無二の自分」幻想は存在していて、「あいつは嘘つきだ」と必要以上に他人を、場合によっては自分を責めていることも多いかもしれない。

▼ 笈入建志

往来堂書店





千葉 聡

ダーウィンの呪い

「ダーウィンの呪い」にかかる、寝ても覚めてもこういう考え方に支配される。あなたは進歩しなくてはならない。そして競争に勝って生き残らなければならない。それは自然界だけでなく人間社会にも当てはまる科学的な法則だ……これは苦しい。そういうときはこの本をひもといて、本当にそうかな？と考えてみよう。あなたは今のままでいい。競争しなくても世の中に自分の居場所はある。そもそもダーウィンはそんなこと言ってない！ 相田みつをや金子みすゞに癒しを求めるのもいいが、正しい知識が自分を救うこともあるのではないかと。



加藤陽子

戦争の日本近現代史 東大式レッスン！ 征韓論から太平洋戦争まで

なぜ太平洋戦争に突入したのか
歴史の「なぜ？」に答える名講義！

何らかの理由で、戦争をしたがっている、あるいは軍備を増強したがっている人がいるとする。その人は日本国民がどうしても「それも仕方がないな」と感じるようになるかをずっと考えて、色々な手を打つだろう。つまり問題は、私たちがどのようにして戦争も仕方がないかと考えるようになるかで、これは「なぜあの戦争に負けたのか」という問いとは全然別のものである。権力・国際情勢・国民世論の緊張関係を意識しつつ歴史を振り返ることで、現在を見る眼も養われるはずだ。



福岡伸一

生物と無生物のあいだ

一冊の本では、まず自分が知りたいことに照準を定めて読み進めるが、読後にその照準を超える事態が生じていると、それは大変嬉しい読書になる。しかし私が昔から本に求めているものは一冊で二度以上美味しいかどうかということ。自分が踏み込んだことが無い、興味が無かったことにまで好奇心を向けさせてくれるような本は、最も嬉しいものだ。福岡先生の美しい文章を味わいながら生命の誕生の不思議さに、生物を形づくる様々な細胞の役割に、またそれらを名探偵さながらに解いていく科学者の口マンに胸熱くし、そして同時に好奇心の扉が次々と開いていく。こんなに嬉しい読書を、先生、ありがとうございます。と感じる自分の生命の構造の不思議さにも思いを馳せることが出来るのです。

▼百々典孝

紀伊國屋書店

梅田本店





倉本一宏

内戦の日本古代史
邪馬台国から武士の誕生まで

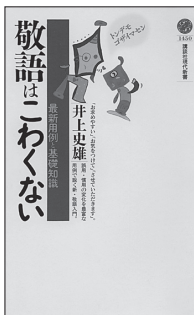


神野志隆光

古事記と日本書紀
「天皇神話」の歴史

これはつい最近のこと、「一冊で日本史が面白くわかる本を教えてください」というお客様におススメさせて頂きました。後日、再来店された折に「苦手だった日本史が面白くなってきました」という感想を頂き、とても感慨深い一冊となりました。天皇、貴族、武士の誕生。妬み、嫉み、自己顕示欲。それぞれの思惑がどうしようもないところまで絡み合い発生してしまった“内戦”。当事者たちの苦しみに思いを馳せながら、そしてまたその子孫たちのしたたかな生存戦略と家系図を見比べていくと、綿々と紡がれていく日本の成り立ちが自然と脳内で形づくられていく一冊です。

もう数十年以上前のことですが歴史の棚を担当している時、日本書紀と比べ古事記の方が明らかに冊数のボリュームがある。棚の中でそのバランスの悪さ、見た目の違和感がどうしても気になっていた。書店員でありながら両書の違いについて深い理解が無いコンプレックスから目を背け続けてきた清算をする時がとうとうきたのだ。そう感じ手に取ったのが本書です。そんな初心者の私に日本の精神史の核となるこの2冊の違いをあらゆる角度から比較し、時には本居宣長『古事記伝』にも触れ我々日本人は何を感じ生きてきたのか、言語化出来ないその感覚までも知ることが出来た貴重な読書となった。以降、歴史の棚で違和感を抱くことは無くなるのであった。新書は便利ですね。



井上史雄

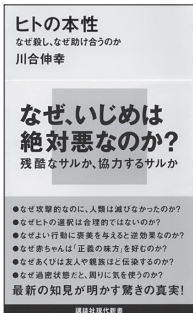
敬語はこわくない 最新用例と基礎知識

私がまだ学生だった頃、たしか、きちんと敬語を使いこなせるようにならなければ、と思って手に取った本。でも中身は、正しい敬語の使い方を教えてくれるものというより、敬語の使われ方や変化を分析する、言語学の本でした。この本に通底しているのは、言葉は使われているうちに丁寧さの度合いが低くなり、新たな言い回しにとってかわられるという「敬意低減の法則」。著者は冗談めかして「食い放題」が「食べ放題」に変わったのだから、そのうち「召し上がり放題」になるのでは、と書いていますが、いまウェブで検索してみると本当に使われ始めているのが面白いですね。この本をきっかけに、私は言語関連の書籍を読み漁るようになったのでした。

▼小松篤史

紀伊國屋書店
吉祥寺東急店

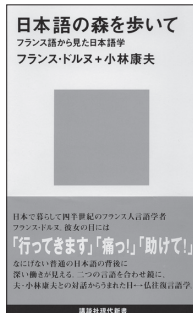




川合伸幸

文中で紹介されていて、久しぶりに思い出したニュース。足を踏み外して電車とホームの間に落ちてしまった人を見ず知らずの乗客たち（総勢40人）が、せーの、で電車を押して隙間を作り救出した、というものです。本著では実験データをもとに、人間は生まれながらに他人を助けることを好む傾向があり、他人が痛がっているのを見るだけで自分も痛みを感じるというのが紹介されます。そして、古代から現代までの歴史を見れば、殺人（戦争）の数は減ってきているのだというデータも。戦火のニュースが絶えない昨今ですが、この本を読むと思えてくるのです。人間、まだまだ捨てたものではないな、と。

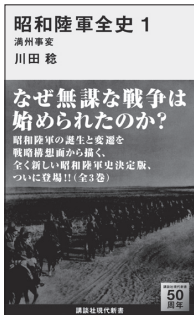
ヒトの本性
なぜ殺し、なぜ助け合うのか



フランス・ドルヌ+小林康夫

学者の夫婦がそれぞれの母語である日本語とフランス語を比較しつつ、日本語の日常会話に現れる特徴を検討することで、人間の言語能力の本質を探っていく……、これだけ書くと難しく感じられますが、取り上げられる例文はどれも平易なものばかりで（そう、例文がとても多いのです）、すらすら読み進んでしまいます。「よく落ちなかったね」「ああ、よく働いた」「よく言うよ」、これらの「よく」はなぜ「良い」のニュアンスとはかなり離れているのか、なんて、すごくワクワクしてきませんか。普段私たちが何も意識せずに使っている言葉の中には、無数の興味深い現象が潜んでいる、それに気づかせてくれた一冊です。

日本語の森を歩いて
フランス語から見た日本語学



川田 稔

昭和史の教養書として、太平洋戦争推進の中心構想を見る。後世からみた昭和陸軍は、白兵戦主義・精神主義に染まった集団だとの印象があるが、陸軍主流の一派である統制派の中心人物・永田鉄山の国家総動員思想に於いては、寧ろこれへの批判を内包した経済合理性と、国家的要請への国民個々人の強い主体的なコミットメントがあって初めて近代国家同士の国家総力戦を戦えるという戦略構想を抱いていたことが、石原莞爾の世界最終戦争構想や、皇道派との異同によって示される。因みに石原の帝国主義的な他国領有についての詭弁は、現在の国際紛争に照らしても古典的常套句であり、ウクライナ侵攻時のプーチンにも重なる。

昭和陸軍全史 1
満州事変

▼後藤 崇

紀伊國屋書店

経営戦略室

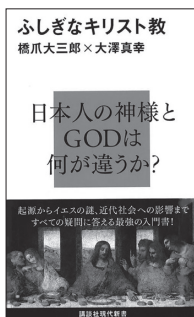




矢吹 晋

文化大革命

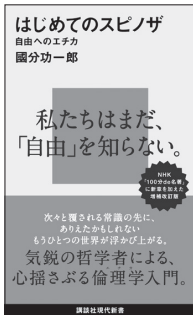
現代中国を理解するために、毛沢東と文化大革命を知っておきたい。特権階級支配や資本主義へのアンチテーゼとしての共産主義は、ユートピアとして発想されているが、強権国家の成立と全体主義及び独裁に至る点で、実際はディストピアである。文革自体は大衆運動の形を借りた党内権力闘争に他ならず、そのこと自体は本質的には共産思想とは関係ないが、絶対権力者への個人崇拜を背景として、毛沢東個人の不完全な共産社会主義が正道として主張された為、長期に亘ってこれを軌道修正できなかったこともあって、共産体制の前段階としての、社会主義体制の欠点を如実に露呈したのが文革であった。平等の意味や「悪平等」とは何かを考えずにはいられない。



橋爪大三郎×大澤真幸

ふしぎなキリスト教

世界標準としての「キリスト教」は、日本においてはなかなか浸透しないが、それは多神教である神道や仏教に比べて、一神教であるキリスト教の根本的な世界観が日本人には理解し難いからである。本書は聖書及び福音書の挿話や言葉を参照し、同じく一神教のユダヤ教やイスラム教との違いを比較対照して、キリスト教の世界観を説明していく。しかし、現世を理不尽に対する試練の場と捉える考え方や、原罪との関係でこの世を不完全な世界と捉える考え方、常に絶対の見えざる神が見ており、この神の視点で考えるという姿勢などは、日本人の生活習慣や思考には馴染みづらい。人智を超える存在であるキリスト教の「神」を理解するのはとても難しい。



國分功一郎

はじめてのスピノザ
自由へのエチカ

NHK「100分de名著」の講義テキストを増補改訂した決定版。NHKテキストはクタクタになるまで読み返したけれど現代新書版ももちろん手元に置いているし、スピノザの入門書としてこれ以上は望めないほどわかりやすいので、とくに若い読者に広く長く読み継がれてほしいと思う。スピノザにとっての「自由」や「倫理」の意味がわかると大げさでなく世界の見えかたが変わるし、読んでいて鳥肌の立つ瞬間がきっとあるはずだ。國分功一郎を読みたいけれど『暇と退屈の倫理学』に歯が立たなかったという人は、本書を読んだから再チャレンジしてみるといい。

▼星真一

紀伊國屋書店
新宿本店

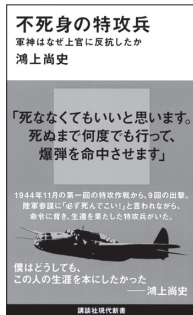




高橋繁行

土葬の村

「これは恐らく、現存する最後の土葬の村の記録である」というオビ文に惹かれ手に取った。令和の時代にいまま土葬の伝統が残っている地域があるとは思ってもみなかったけれど、奈良とか京都とかの地名を見れば意外なようで納得できるような気もする。著者は土葬ばかりでなく野焼き火葬や風葬についても調査を進めるが、善し悪しについての評価をしない。土葬の理由を問われ地元の人は「そら焼かれるのはかなわん。熱いやんか」と答えたけれど、死んでしまえば熱さを感じることもないだろう(たぶん)。葬儀は残された者たちのための儀式だと思えば、急がず焦らずじっくり時間をかけて見送りたい気持ちも、ずいぶん腑に落ちると思った。



鴻上尚史

不死身の特攻兵 軍神はなぜ上官に反抗したか

名著『「空気」と「世間」』や『「空気」を読んでも従わない』の実証篇とも言うべき一冊。特攻が優秀なパイロットの命と貴重な戦闘機を無駄にする愚かな作戦であることを知りながら戦争継続のために特攻を命じ続けた大本営や上官＝世間と、大切なのは死ぬことではなく敵に損害を与えることだと訴え、9回に及ぶ特攻から生還した21歳の特攻兵。戦後になって特攻を賛美し、「死にたくなかった」と語る元特攻兵を「情けない」と批難する傍観者たち＝空気。佐々木友次さんのインタビューを読み、80年近くまえの「昔話」とは思えなかった。



千葉雅也

現代思想入門

『現代思想入門』は私が文庫・新書を担当して1年が経ったころに出版されました。この本は文字通り飛ぶように売れた一冊で、それまでほとんど経験したことのない事態でした。以前雑誌・実用書を担当していたときも、その本の新鮮さを意識し売り逃さないようにと考えながら日々棚を確認していましたが、今までの2~3冊単位の補充では到底追いつかない売れ方をするのを目の当たりにし、まさに文庫・新書担当者としての洗礼を受けた本でした。売り逃さないということは担当として常に強く心掛けていますが、改めてその思いを強くした印象深い一冊です。

▼石橋昌代

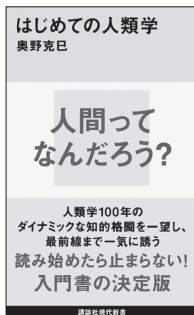
京都大学生協同組合 ショップルネ



林 真理子

成熟スイッチ

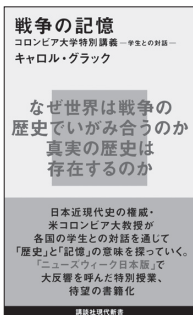
成熟ってなんだろう。果実ならば堅くて青い実が時を経て軟らかく熟していく、そんなイメージだ。「心」を持つ人の成熟は、まさに人それぞれ。人生の不条理や隠したくなるほどの喜びを経験し、時には振り返り養分を吸収してその人なりに成熟していくのだ。成熟に正解はない。形から入る成熟もあるし、憧れの先人を追いかけるような方法もある。世代や個性によって、また個人でもその時々で違ってくるだろう。そして人の成熟にゴールはない。誰のためでもない、私自身の豊かな人生のために、林真理子さんが成熟に向かうヒントを教えてくれる。これからもこの本を開いた時、また新たな成熟スイッチが見つかるかもしれない。楽しみだ。



奥野克巳

はじめての人類学

ある9月の昼下がり、とても控えめに声をかけてくださった方がいらっしゃいました。名刺には《講談社学芸第一出版部K》。編集の仕事で京都大学にいらした折に寄っていただきました。京都大学出身で在学中は当店にも来てくださっていたとのこと。それまで編集の方と直接お話しする機会はほぼありませんでしたが、色々と話が弾みKさんの編集者としての思いに触れることが出来ました。一冊の本を作ることにかかるKさんの情熱がとても新鮮で強く響き、この本を目にすると一冊の本と向き合うことの大切さを思い出します。書店員として初心に戻ることでできる一冊、編集者Kさんとのご縁がもたらしてくれた大切な一冊となりました。



キャロル・グラック

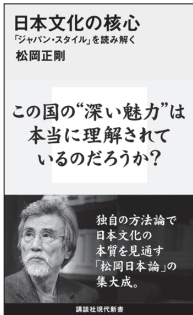
なぜ歴史を知る必要があるのか。著者のこたえを端的に言えば、責任があるから、です。負の歴史を繰り返さないと言うだけでは十分ではなく、私達の責任について考え、それを回避するために現在何をすべきか、という著者の言葉を2024年の今読むと思ひ起こすのは過去の戦争に限りません。本書の優れた点は、歴史を学ぶ際はそれに付随する「記憶」を知ること不可欠で、それを丁寧に示すところです。記憶は人の立場によって異なり、ではそこから何を学ぶかということ、実際に異なる地域出身の学生たちの対話から読み取ることが本書の醍醐味です。「……単に他の見方から学ぶというだけでなく、自分の見方の原点と限界について学ぶのである。」(197頁) 本書中の著者の指摘は心にとどめておきたいものばかりです。

戦争の記憶
コロンビア大学特別講義
—学生との対話—
キャロル・グラック

▼成田愛美

教文館

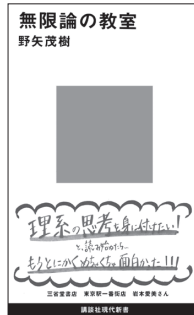




松岡正剛

本書を読み、私は日本に関する知識がだいぶ欠損しているのを痛感しました。細かな知識と著者の洞察力に唖るばかりです。かつての日本での中国に倣った漢の文化とそれを取り込んだ独自の和の文化の両立を、「これはダブル・スタンダードとも言えますが、私は『デュアル・スタンダード』を意図したと考えています。デュアルとは『行ったり来たりできる』ということ、また『双対性』を活かすということです。」(45~46頁)と松岡正剛さんは言い、日本社会をその根っこにある多様なものをつくり変わりから捉えます。簡略化や一極集中するような傾向から身を離して、これまで培ってきたもの、そしてこれからの社会も含めた日本文化の可能性に目を向けるための道しるべとして、本書は重要な一冊です。

「ジャパン・スタイル」を読み解く
日本文化の核心



野矢茂樹

私の人生でいちばんお気に入りの新書です。いつ読んでも、無限をめぐる数学と哲学を知ることが、ただただ楽しくなるんです。対角線がアツい。集合がアツい。難易度が高い……でも、いつのまにか軽やかに読まされているんです。軽やかなのは青春小説の登場人物風に仕立てられたタジマ先生の楽しい語り口だけ。内容はそれどころか「ベツタリ」していたり手間のかかる思考過程ばかり。私は数学がニガテなので本書の内容を正確に理解できているかはさておき、本書独特の一文一文に誘い込まれるまま想像力をめいっぱい働かせ、難問を解く過程をどうにか理解したくて説明を噛みしめるとき、おもしろさがじわあっとこみ上げます。

無限論の教室



鈴木 晶

グリム童話 メルヘンの深層

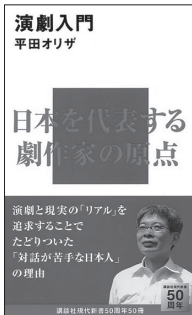
受験勉強からやっと解放され、これからは自分の興味のある本を読むんだい、と思い新古書店をぶらぶらしていたときを見つけました。当時大塚英志を読んだりして物語論に関心があったのと、「本当は怖いグリム童話」のような本もすこし前に流行ったタイミングでありました。本書はグリム童話成立の社会的背景や内容の精神分析考察に重きが置かれていて、内容は大変読みやすく面白く、わたしが初めて通読した講談社現代新書です。

▼飯田正人

くまざわ書店

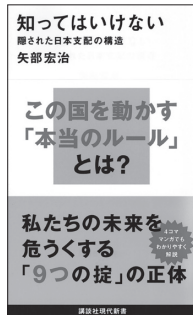
営業推進部





平田オリザ

演劇入門



矢部宏治

知ってはいけない 隠された日本支配の構造

わたしは実はインプロ（即興演劇）というものを嗜んでおり、その師匠から推薦され手に取りました。本書は絵やピアノと同じように、誰もが演劇をしていいのだという立場のもと、戯曲をつくる技術を言語化していく本。テクニカルな話としては、情報の偏りのある人物を出会わせたほうが観客に必要な情報を不自然にならず示すことができる、など試してみたいことがたくさん見つかりました。ふだん演劇と関わりのない人にとっても、演劇に興味を持ったり、人と人との関わりについて新たな視点を獲得できる良い本だと思います。

政治・時事・社会に関する書籍の担当となったものの、いくら新聞を読んでもなんだかよくわかってこないな、と悶々としていた頃に本書と出会いました。なんだか陰謀論っぽいタイトルだなと訝りつつ、同じ著者の『日本はなぜ、「基地」と「原発」を止められないのか』（集英社インターナショナル）が非常に売れた記憶があったので、新書ならば読みやすいかなと手に取りました。これほど日本で暮らしている人にとって嬉しくない事実が書かれているにもかかわらず、そういう行動原理であるならば、いろいろなことがスッキリ腑に落ちる！ その感覚がものすごく嬉しかった本です。



今村仁司

現代思想のキーワード

本書は、書名とは裏腹に現代思想の用語辞典としての性質は持たない。ノマドロジー、批判理論、マルクス現象、脱構築、暴力、自律性や希望といった鍵概念のもつ意義が、私たちの生きる社会と現代思想の関係性、その網の目のなかで、瑞々しい文章で展開される。とくに、全編にわたって通底していると思われる、暴力と自律性についての考察は白眉と言えるだろう。不可避的に暴力や権力が前提となるこの社会において、諸個人の自律性の確立を目指すことは、現代でも普遍的な課題であると考えられる。40年近く前の刊行物ながら、古びることなく、今なおアクチュアリティを放つ珠玉の一冊。

▼磯前大地

くまざわ書店
八王子店





藤原帰一

戦争を記憶する
広島・ホロコーストと現在

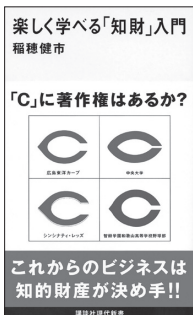


阿部謹也

「教養」とは何か

たとえば、広島とホロコーストについてがそうであるように、地域や時代によって、反戦・正戦をはじめとする戦争の記憶との向き合い方には大きな違いが生じる。そしてさらには、異なる価値観で相手の主張は歴史の修正であるとする、記憶の戦いがおこなわれる。本書は、そのような戦争の記憶にまつわる社会通念や国民の物語が、上からも下からも形成される様を読み解き、相対化することを試みる。その先にある、イデオロギーとは違うかたちで死者をただ静かに見つめようとする姿勢は、戦争が過去のものとはなりえなかった21世紀の世界であっても、各々の戦後を生きる人々に問いを投げかける。現代社会にも無縁にはなりえない、著者の言葉が胸に響く。

教養というと、どのようなイメージをもたれるのが一般的であろうか。西欧の近代的個人像にもとづく、知識の総量の多さによるのだろうか。本書によれば、一人一人の人間が完全に教養ある人になりきることはできない。鍵となるのは「世間」の概念だ。明治以来、国家の枠組みに回収される危機に見舞われながらも、いまでも人々との関係の世界を軸とする「世間」。人は、他の人々との間で「いかに生きるか」という問いをたて、何らかの制度や権威に頼ることなく、周囲の人に自然に働きかけることができ、教養人になりうる。国家や市場原理のもと個人単位の教養が猛威をふるい、羨望される現在においても、私たちにありべき道を示す名著。



稲穂健市

まず帯が最高です。「『C』に著作権はあるか？」と複数のCを使ったロゴマークを並べて、直感的に題材への興味がわく帯が素敵です。

知的財産権とは何か、日常生活や仕事とどう関係があるかが分かる本です。SNSのおかげで誰でも広く情報発信ができるようになった反面、誰かの権利を侵害してしまう心配も日常茶飯事に。権利関係のモヤモヤを解決するための最初の一冊として最適です。

楽しく学べる
「知財」入門

▼小泉千夏

ジュンク堂書店
池袋本店





宇野重規

民主主義とは何か

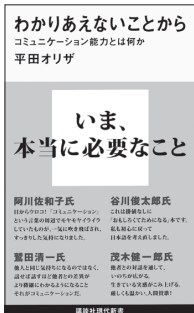
ものごとの決め方に疑問を持った時、歴史から振り返って考えるために必読の書です。古代ギリシアから始まり戦後日本までの民主主義の仕組と考え方について知ることができます。2020年の発売から読まれ続けて、当店の新書売場ではずっと面陳をキープしています。先日累計1000冊実売を突破しました。現代新書の新定番です。



江村 洋

ハプスブルク家

西洋美術の展覧会巡りをしてしていると、パトロンとしてハプスブルク家の皇帝たちが紹介されていることが多くあります。世界史の教科書で名前だけは知っていても、いつの時代のどんな人だったか分かりません。この本一冊で700年にわたる歴代当主の事績が把握できて、名画の描かれた時代背景を知ることができました。「ヨーロッパの背骨」と呼ばれる名門王朝を通して、世界史の流れを追える一冊です。



平田オリザ

わかりあえないことから
コミュニケーション能力とは何か

日本における教育の歴史と問題点を踏まえながら、「コミュニケーション能力」とは何か、「対話」とは何かを多角的に考察する一冊。人間関係に悩んでいた20代の頃に手に取り、「コミュニケーション能力」の有無は属人的な問題というより、産業構造や日本の文化的な特質によって顕在化するものであるということを知り、肩の荷が下りた覚えがあります。「コミュニケーションの環境をデザインする」という視点は、チームで働いている今でも示唆を与えてくれますし、何より「わかりあえない」というところから歩きだそう」というメッセージには、粘り強い「対話」が必要とされる身近な場面においても大いに励まされます。

▼益子陽介

TSUTAYA
デイズタウンつくば



宇野重規

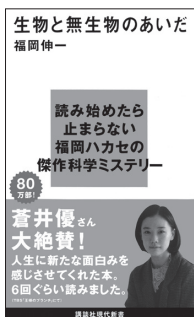
民主主義とは何か

菅義偉氏が総理大臣になって、すぐに起こった“あの”騒動の6名の内のおひとり、宇野重規先生の著書。ちょうどその頃コロナ禍で、大学キャンパス内での人々の交流が少なくなっていた時期に、「大学内にある書店」という東京大学生協の強みを活かしたことを何かできないかと考え、宇野先生にお願いして、この『民主主義とは何か』をテーマにオンラインイベントを初めて開催しました。その時は民主主義に関心が向けられていた時期だったこともあり多くの方に参加いただきました。そして今まさに民主主義が問い直される社会状況だからこそ、おすすめできる一冊です。

▼竹原昌樹

東京大学消費生活協同組合

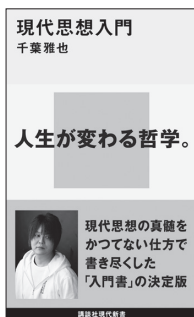
本郷書籍部



福岡伸一

生物と無生物のあいだ

私が今とは別の理系の大学で担当をしていた頃に、もちろん理系の学生ばかりだったので、新書と言えばブルーバックスのイメージがあった売り場で、珍しくと言っては失礼ですが、現代新書でありながらも話題になった書籍で印象に残っています。発売から15年以上経っていますが、新紙幣に変わる前だからこそその「そうだったのか」と思える話やコロナの時によく聞いたPCRについての話、そして理系の研究生活などにも触れられていて、なぜか今に重なってくる話題も多いです。生物の難しい話もありますが、そこが分からなくても楽しめるからこそ、第1回新書大賞受賞作だと感じさせられます。



千葉雅也

現代思想入門

哲学の入門書は「考えること」の初歩だからこそ、大学では文系・理系関係なく幅広く学生の関心が寄せられます。こちらの『現代思想入門』も多くの東大生が興味を持った本でした。「きちんとする」ことでの秩序化、そんな窮屈な現代社会に同調ではなく、協調していくこと。「差異」を認めていく社会とは。現代社会を生きるためのヒントとして、現代思想はどんな意味があるのかが見えてくる本です。巻末ではなかなか通読することの難しい哲学書を読み解くコツにも触れていて、研究者の読書法が垣間見えて大変興味深いです。



福岡伸一

生物と無生物のあいだ

分子生物学の隆盛をもたらしたDNA構造解明の歴史から紐解き、「生命とは何か」という問いに迫る。門外漢には窺い知れない研究室の空気感を巧みに再現する文章に誘われ、探究心と功名心がせめぎ合う中で謎に迫る研究者たちのドラマと〈生命＝動的平衡を保つ〉働きが示す躍動的な美しさに惹きつけられ、そして感嘆する。PR誌『本』の連載を偶々読み始めたのが本書との出会い。自然科学系を〈読まず嫌い〉だった私が最後には「読み終えるのが惜しい……」と残念に思い、同僚に薦めてしまうほど入れ込んだ一冊。

▼岡一雅

MARUZEN & ジュンク堂書店

梅田店



宇野重規

民主主義とは何か

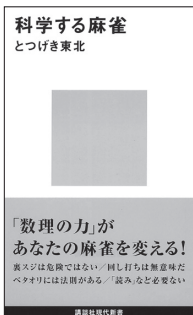
古代ギリシアに始まり、市民革命期の仏・米・英国で理念と制度の近代化を成し遂げた民主主義が今、大きく揺らいでいる。著者は民主主義に纏わる言説を丹念に追いかけてながら、今なお「未完成な制度」である民主主義の行く末を指し示し、私たちに保守・アップデートし続ける覚悟を促す。19世紀アメリカの自治に「デモクラシー」が持つ可能性を見いだしたトクヴィルの姿と、「民主主義」への希望を訥々と語る著者の姿が重なりあう。果たして私たちは民主主義と共に、この困難な局面を乗り越えることができるだろうか？



高槻泰郎

大坂堂島米市場 江戸幕府 VS 市場経済

堂島米市場なくして大坂が「天下の台所」にはなり得なかった。江戸時代の経済を支えた米市場の実態をわかりやすく解説したのが本書だ。米商人と幕府・大名が様々な思惑と各々の倫理観をぶつけ合いながら発展していく有り様は、堂島米市場が現代に近しい金融システムだったことを改めて証明してくれる。現担当の日本近世史棚にある著者の『近世米市場の形成と展開』（名古屋大学出版会）が気になりつつも手が出せずにいた身にとって、本書の刊行はとて有り難く感じたものだ。まさに新書の理想型・お手本というべき一冊。



とつげき東北

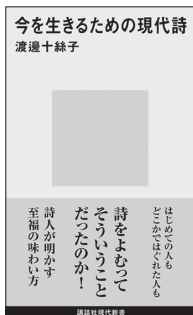
科学する麻雀

私が最初に購入した現代新書。ミステリーと麻雀本しか買っていなかった20代の頃に、すごい麻雀戦術書が発売されたと聞き、全く立ち寄らなかった新書売場にて購入して内容に驚愕した事を覚えています。運と流れがメインのオカルト系の戦術書ばかり発売されていた時代に、東風荘の膨大なデータを基にした統計から「答え」を導き出すデジタル系の戦術書はとても斬新で、今までとは全く違う打ち方を試したりしていました。麻雀戦術の基本思考がオカルトからデジタルへ変わっていくきっかけになった一冊であり、今でも愛読されるロングセラーでもあります。それにしても麻雀戦術書が講談社現代新書から何故発売されたのか、ずっと不思議に思っています。

▼藤堂恒平

丸善
名古屋本店

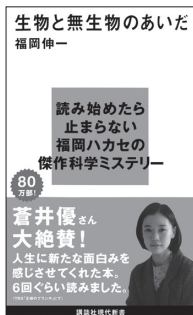




渡邊十絲子

現代詩 今を生きるための

新書担当になってから最初に購入した現代新書。詩には特に興味もなく、今月の新刊の中のひとつという位置付けであったものが、日々の作業の中で何かどうも気になって、とりあえず序章を読んでみたら一気に惹きつけられて購入しました。私にとっては、現代詩の入門書としてより、本との出会いについて書かれている本として心に残っており、人それぞれに本に書かれている事がわかる時があれば、わからない時もあり、自分の感想や世間の評価などとは関係なく、どの本も誰かにとっては愛読書になる可能性があるということ思い出させてくれた一冊です。



福岡伸一

生物と無生物のあいだ

書店に勤務してから最初に購入した現代新書。第1回新書大賞の大ベストセラーであり、発売からずっと売れ続けていて平積みしておけば間違いのない定番書です。まだ文芸担当だった頃に発売され、ミステリーばかり読んでいて、講談社の新書といえば講談社ノベルスにしか興味のなかった私でも購入するほど、当時は話題になりました。とにかく文章が上手く、上質のエッセイでもあり、面白いミステリーでもあり、生物学というジャンルを超えて万人にオススメできる一冊です。



池田弥三郎

光源氏の一生

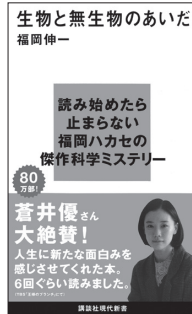
この本は、現在流通している現代新書の中で最も古い通巻2番です。60年前の創刊時の一冊を今も読めるということは素晴らしいことだと思います。「印象に残った現代新書を」というテーマでお話を頂いた時に、初めてこの本を手に取り、そして読みました。とても分かりやすく、専門的なことを著者の視点からバツサリと取捨選択して書かれている、まさに新書らしい新書でした。お恥ずかしながら著者の池田弥三郎氏を私は知りませんでしたが、タレント教授のはしりとしても人気の学者だったそうです。期せずして今年のNHK大河ドラマは紫式部の物語です。関連書を読もうと思った時にこういった書籍と出会える楽しみをこれからも作ってほしいと思います。

▼新書担当者

丸善 日本橋店



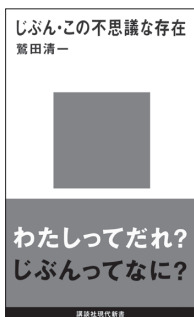
生物と無生物のあいだ



福岡伸一

洋の東西を問わず、優れた科学者は素晴らしい文学を残すと言われますが、この本の著者、福岡伸一さんもまさにその一人だと思います。「生命とは何か」という永遠の問いに対して、語りかけるように書いています。すでに生命科学を学んでいる人には当たり前のことや、もっと深く知りたいということもあるのかもしれませんが、そこは新書です。まったく門外漢の人間がこのテーマで一冊読み切れるということが本当にすごいと思います。同社の「ブルーバックス」でなく、「現代新書」レーベルでこの書籍を刊行したというところにその意味を感じます。そういった一般向けのレーベルブランドはこれからも大事にしてほしいと思います。





鷺田清一

おそらく初めて自発的に興味を持って買った現代新書はこれだったように思う。『じぶん・この不思議な存在』この魅力的なタイトル。自分とは何か、という哲学を優しく紐解いていく。著者の「自己と他者」という講義に対しての学生の答案から始まるプロローグがとてもユニークで、今まで私が持っていた「新書は堅い」イメージが覆され、資料や学びの為ではなく娯楽に近い感じで楽しめました。色々な本を読んできましたが、20年近く前に出会ったこのプロローグは私の中で一番のお気に入りとなっています。「自己と他者」これに対して「〈大好きだ!〉攻撃」というタイトルの答案。面白いに決まっていると思いませんか？

じぶん・
この不思議な存在

▼横山みどり

丸善 丸の内本店





久坂部 羊

人はどう老いるのか



高橋繁行

土葬の村

両親の老い、自分の老いについて考える事が増えたタイミングでこの本を読みました。医者として、それ言っちゃっていいの？という「ぶっちゃけてる」発言も非常にありがたい。必ず訪れる「老い」、おそらく目を背けたい人も多いのだろう。しかし、これから起きる事について知っているのと知らないのとでは本人も介護する側も全く違ってくると思う。「老い」や「死」に対する心の持ち方を、死が差し迫ってからではなく少しでも早くに知る事で精神的負担が減り最期まで穏やかに過ごせるのかもしれないと思ったら…本当にこの本を数多くの方に読んでいただきたい。救いの一冊になるはず！みんな老いるし、みんな死ぬ、それは避けられないのだから。

「死は穢れ」の思想が色濃くあった頃の滅びゆく弔いの風習。土葬がまだ残っている事にも驚きましたが、知らなかった衝撃的な事実が沢山ありました。昔は当たり前だったかもしれないが、ご遺体の扱い方など今では考えられないような事に心が痛みました。それでも過去の事を伝えていく事は大切なんだと思います。土葬だけではなく各地の様々な弔いの風習がまとめられており、貴重な証言や写真も多数掲載されており民俗学の面白さ満載。コロナ禍を経て、家族葬が増え、またこうして弔いの形が変わっていくんだなあ、昔の人が今の葬儀を見たらどう思うんだろう、とかそんなことを考えました。



松前 健

出雲地方は私の出身地であるが、記紀や風土記に多くの神話が残されている地域であり、本書はその神話についてコンパクトにまとめて解説した本の原点といえる。

この本の刊行後、今日に至るまで、多くの新たな考古学的発見があったが、それでも、出雲神話の入門編としての本書の意義は、いささかも減じていないと感じる。現在は品切れ状態だが、復刊フェア企画などがあれば、必ず加えてほしい一冊である。

出雲神話

▼内田俊明

八重洲ブックセンター



漢字の字源

漢字の字源

阿辻哲次



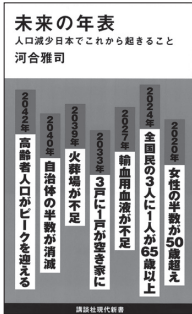
馬は二本足だった？ 方程式の語源は？

漢字でたどる
中国四千年の文化史

講談社現代新書

阿辻哲次

未来の年表 人口減少日本でこれから起きること



河合雅司

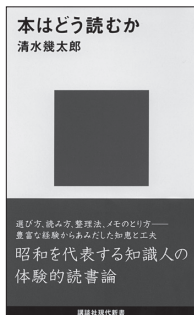
八重洲ブックセンターの創業40周年イベントで、著者の河合氏にトークイベントをしていただいたことが思い出される。

予測本は数あれど、今後日本は、世界はどうなっていくのかを、数十年後まで「年表」化した本書は、一読して受けるインパクトがすこぶる強烈であった。

本書が刊行されて6年以上経つが、残念ながら、よくない予測が既に当たってしまってきている。今後も目が離せない一冊である。

著者は漢字研究で知られる京都大学名誉教授。阿辻氏の漢字にまつわる一般向けの解説書は、非常に数多く出版されている。いずれも確かな知見に基づいた、詳しい解説であるとともに、軽妙で読みやすくわかりやすく書かれていることが、人気の理由であろうと思う。

新たな著作が今後も重ねられていくであろうが、原点である本書を推したい。



清水幾太郎

2021年春、中公新書『ルワンダ中央銀行総裁日記』のリバイバルヒットがありました。プロモーションの妙で掘り起こされたこの本の初版は1972年。同年刊行の現代新書にはどんな本があったのだろうと純粋な興味から調べ、出会ったのが本書です。清水幾太郎先生が長年の学究生活で身に付けられた経験から語られる読書術。本に接し生きていく上で、自分の血肉にするにはどう向き合い、どう読めばいいか。読み進めていくと本の読み方とは即ち「本との付き合い方」なのだろう、では振り返り自分はどうかと付き合ってきたのだろうか？と考えさせられます。即効性はなくともずっと身体に入ってきてじわりと効いてくるような、本を読む人生の道標となる本です。

本はどう読むか

▼里見清

山下書店
羽田店

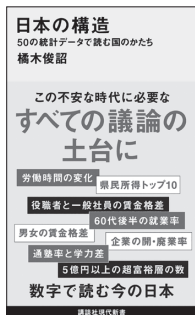




林 真理子

2023年夏、本書が売上累計200冊を超えた旨をTwitterへ記したところ、現代新書公式アカウント様が林真理子先生へお伝えくださり、大層感激されて御礼にと、恐縮にも特別にオリジナルのサイン色紙をいただきました。営業の方から伺ったお話では林先生いわく「本を買う目的第一のお客さんが集う書店でなく、旅客が集う空港内書店での200冊は重みが違う」とのこと。光栄なお言葉であると共に自分にとっては新たな気付きで、仕事の上や物の見方で、先々何かに繋がるようなスイッチが入った思いがしました。サインに付されていた一言は「毎日小さなスイッチを」。入れられる日も入れられない日もあり。しかし日々心の隅に置いて過ごすようには心掛けております。

成熟スイッチ



橋木俊昭

本書は、労働関連、社会保障、人口動態等々に関する統計50項目に各々解説を付した、現代日本を読み解くための基礎データブック。帯のコピーが振るっており「すべての議論の土台に」。三軒並んだラーメン屋の真ん中の店が「入口はこちら！」と貼紙する小嘶にも似て、ずるいのだけど上手い。それぞれ議論する本の群れの中でより生きるのではと思い、丸々そのまま大書したPOPを付し、民主主義や日本の今後を論じた本の平台の中心に積んだのでした。本の企画そのものに加えて、熱意とエスプリの効いたコピーも良かったのでしょうか。自分はそれをちょっと目立たせる一工夫をただけですが、予想をはるかに超え売れ続けたことには、大きな手応えを感じました。

日本の構造 50の統計データで読む国のかたち



矢吹 晋

文化大革命

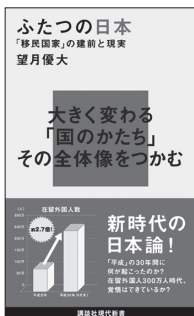
全容を理解するのがとても困難な文化大革命をハンディで専門性高くまとめた本書は、文化大革命を知る一歩として有益だと思います。毛沢東の目指したものを思想、人物像に分け入りながら解説。林彪、江青、鄧小平など関わった人物についても詳しく記されています。さらに文化大革命について知りたくなる新書らしい一冊だと思います。

▼ 芝健太郎

有隣堂

店舗運営部仕入・販促課





望月優大

「移民国家」の建前と現実
ふたつの日本

昔は日本には移民はいない、と言われていましたが、いまや当たり前になった外国人の労働者。さまざまな問題をはらむ技能実習生の現実と問題を一般に向けて提示。問題意識も高く非常に面白い。



柴田元幸

アメリカ文学のレッスン

メルヴィル、トウェインなどアメリカ文学の名作を訳しながらアメリカ文学における「名前」「食べる」「幽霊の正体」などを追っていくスリリングなエッセイは、英米文学の案内として最適。この本から20年以上を経た今でも多くの訳業で英米文学の世界を楽しませてもらっています。



今村仁司＝編

現代思想を読む事典

大学院修士課程に入っすぐ、副査を担当して下さった先生から本書を薦められ、「もっと早く読んでおきたかった……」と後悔した思い出があります。幅広い人文学のジャンルを広く取り扱っている「事典」にもかかわらず、新書サイズで持ち歩きやすいところが有難かったです。本書の「はじめに」には、「古典的諸思想もかつては現代思想であった」、「本『事典』が読者自身の「思想の言葉」を作ることに役立つことを、編者は心から期待している」とあります。本書が出版されたのは、私が生まれる前の1988年ですが、これを手に取った人々が現在、「現代思想」を編んでいるのだと思うとわくわくします。

【山田】

▼山田萌果・うらら橋原杏李・林下沙代

紀伊國屋書店

札幌本店





久坂部 羊

人はどう死ぬのか

医師である久坂部羊先生が、様々な医療現場の経験を経て「死に関する新しい教科書」として執筆された本作。「はじめに」に、死とはだれにでも必ず訪れるものであり、しかし練習もやり直しもできないものであるというお話があり、何か遠い出来事ではなくもっと普段から死について考えておくべきことがあると、一考する機会となりました。いざ死が目の前に来た時にどうしたらいいのかという漠然とした不安を少しでも減らし、また自分自身だけでなく家族についてもより良い死を迎えるためにどう死と向き合うのかを医師として経験した様々な事例などを交えながら教えてもらえます。

【橋原】



今道友信

美について

美学を研究すると決めたときに手にした美学入門書のうちの一冊です。最近再読しましたが、一度目に読んだときより理解できる部分が広がっていたことに自分で驚きました。本書において画期的なのは、「美」について考える際、なぜ「芸術」を題材とするのかが丁寧に述べられている点です。著者は芸術を、「美が人為的に集結せしめられ、またそれゆえ凝集して発見される場所となっている」とし、その芸術を理解するためには、ある種の知性が必要なのだと述べています。美は、その知によって味わい深くなるのです。年を重ね、知が深まることで分かるようになる美があるから、再読した際に理解が深まっていると感じたのかもしれませんが。【山田】

独立国家のつくりかた



坂口恭平

思えば「人文書」の棚を任されるようになり、そして個人的にもよく手に取るようになったのは、ちょうど本書が刊行された頃でした。当時はこの大胆なタイトルも相まって、なにやらセンセーショナルな一冊と捉えられることも多かったように思いますが、あらためて読んでみて驚いたのは、そのことばが当時より一層現実味を帯びたかたちで、2024年の自分に響いてきたこと。決して扇動的ではない、シンプルで真っ直ぐなことばは、一人ひとりの人間の自立（もしくは自律）をやわらかく鼓舞する。歩きかたを変えること。視点を変えること、そして思考しつづけること。12年の時を経てもお、いまだ瑞々しさを失うことなく、高らかに響くマニフェスト。

【林下】



第3部

現代新書を知るための
トリビア10

現代新書は1964年の創刊以来、2024年3月までに2740冊の本を作ってきました。その中で100万部以上のヒット作や100刷を超えるロングセラーを生み出してきました。

小冊子の最後となる第3部では、現代新書が60年の歴史で打ち立てた記録や「へえ、そうなんだ」という豆知識を並べました。どうぞご覧ください！



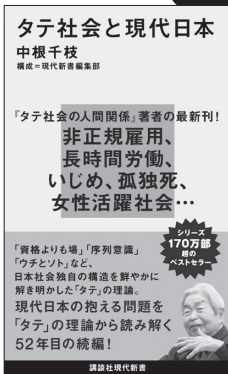
Let's go!

Q 1

現代新書の
最年少／最年長
著者は？

A 1

中根千枝 **最年長**

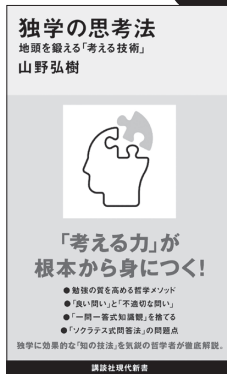


『タテ社会と現代日本』
(2019年、通巻2548)



92歳 11ヵ月

山野弘樹 **最年少**



『独学の思考法』
(2022年、通巻2654)



27歳 4ヵ月

Q 2

現代新書で
もっとも売れた本は？

A 2

渡部昇一



『知的生活の方法』

(1976年、通巻436)



累計製造

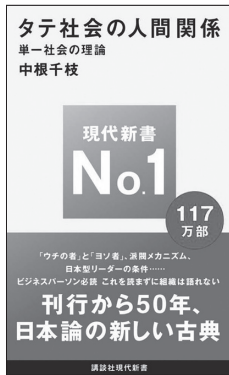
1,191,700部

Q 3

現代新書でもっとも
増刷されている本は？

A
3

中根千枝



『タテ社会の人間関係』

(1967年、通巻105)



135刷

Q 4

現代新書で
多く執筆している
主な著者は？

A

4

保阪正康	11冊
池上 彰	9冊
板坂 元	9冊
加藤秀俊	9冊
佐藤 優	8冊
橋爪大三郎	8冊
畑村洋太郎	8冊

※共著、対談本、訳書などを含む。同数は五十音順で表記

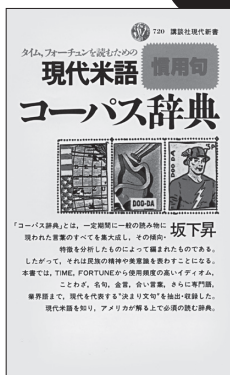
Q 5

現代新書でもつとも
短い／長い本は？

A 5

坂下昇

長い本



『現代米語コーパス辞典』

(1983年、通巻678)



1203ページ

川端康成

短い本



『美しい日本の私』

(1969年、通巻180)



74ページ

Q 6

現代新書で
発売後すぐに10万部を
達成した本は？

A 6

発売
28日



『未来の年表2』

河合雅司
(2018年5月、通巻2475)

発売
15日



『おどろきの中国』

橋爪大三郎×
大澤真幸×宮台真司
(2013年2月、通巻2182)

発売
6日

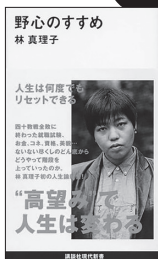


『学び続ける力』

池上 彰
(2013年1月、通巻2188)

一言メモ この5冊のうち、『学び続ける力』『おどろきの中国』『野心のすすめ』の3冊は同じ2013年に刊行されました。さらに2013年は3月発売の乙武洋匡『自分を愛する力』、5月発売の藤田伸二『騎手の一分』もベストセラーになり、5ヵ月連続で10万部達成という記録的な1年となりました。

発売
40日



『野心のすすめ』

林 真理子
(2013年4月、通巻2201)

発売
33日



『還暦からの底力』

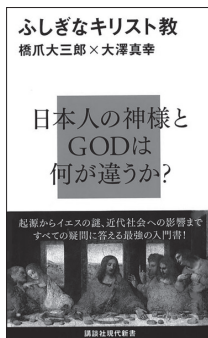
出口治明
(2020年5月、通巻2568)

Q⁷

これまで
「新書大賞」を受賞した
現代新書は？

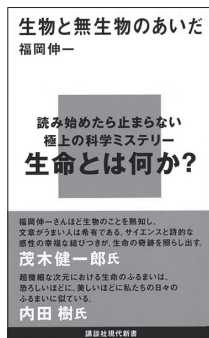
A 7

2012年



『ふしぎなキリスト教』
橋爪大三郎×大澤真幸

2008年



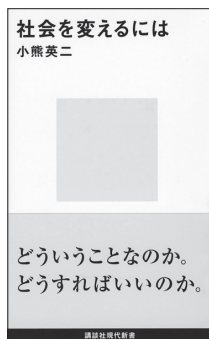
『生物と無生物のあいだ』
福岡伸一

2023年



『現代思想入門』
千葉雅也

2013年



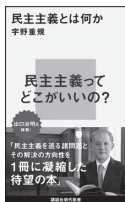
『社会を変えるには』
小熊英二

Q⁸

岩波、中公、現代新書の
「新書御三家」すべてに
執筆している
主な著者は？

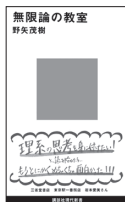
A 8

宇野重規



『へ私』時代のデモクラシー』岩波新書、2010年など
『保守主義とは何か』中公新書、2016年など
『民主主義とは何か』現代新書、2020年

野矢茂樹



『哲学の謎』現代新書、1996年
『無限論の教室』現代新書、1998年
『入門！ 論理学』中公新書、2006年など
『言語哲学がはじまる』岩波新書、2023年

河合隼雄



『コンプレックス』岩波新書、1971年など
『無意識の構造』中公新書、1977年
『家族関係を考える』現代新書、1980年

貝塚茂樹



『孔子』岩波新書、1951年など
『史記』中公新書、1963年
『論語』現代新書、1964年

Q⁹

現代新書で

「はじめての〜」がつく
タイトルの本は何冊？

Q 10

一冊における著者の
人数（共同執筆者）が
多い本は？

A

10

今村仁司=編
『現代思想を読む事典』
(1988年、通巻921)



50名



伊東俊太郎=編
『現代科学思想事典』
(1971年、通巻267)



120名

